今を生きる

一歩一歩を踏みしめて
或いは
何となく流されて

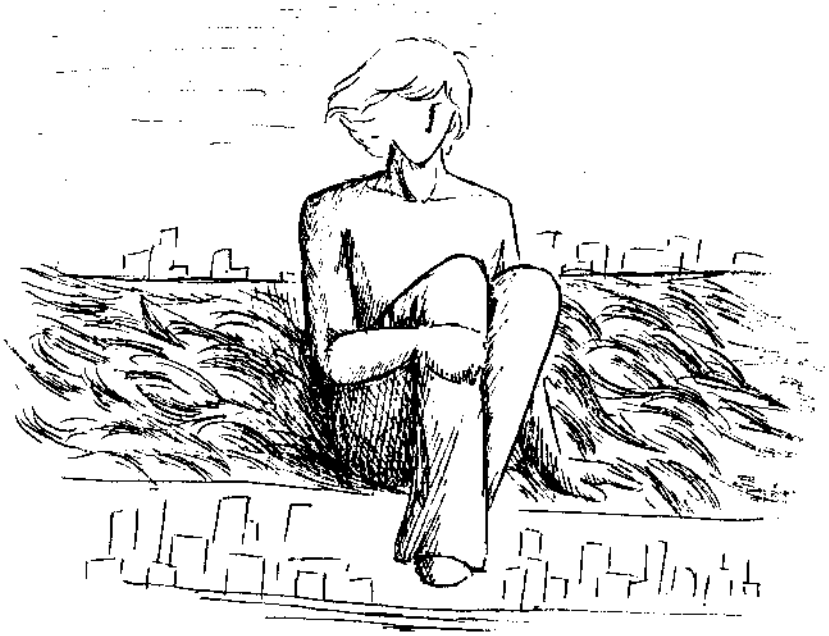
前に何がある？
過去と現在の意味は
ひとえに
それにかかっているというのに

誰が　そんなことを言いだした？
人々がそれを知った時
歴史が始まった

その歴史をひきずって
それでも湧きあがる思いに
また、気付かないうちに

ここにいるんだね

みんな



目次

巻頭言
〝心辺〟雑記　後期自治会長　梅田一成　4

School Life　5

正門のこと・いろいろ　なるど玲緒　5
ふと思ったこと　橋田和美　6
私にとってクラスとは？　Moon Flower　7
ある日 ある時 あるところで　ねむの木の精　8
友人　くま　9
We Love Friends！　大手前の姐御A　11
大手前の姑B
授業について　サマーセット・モーム　13
文化祭について　山崎千登世　13

いまみるゆめ―現代擬似小説―　24

遠景　康之　24
曇り空　英光　26

座談会　おとなとこども　28

あなたの恋愛論　33

恋愛論　角屋タマ子　33
ぼくの恋愛論　りありい　35
修学旅行　北川好枝　14
演劇への招待　河野敏明　15
基礎からの落語　諸星あたる　16
ピン球を追って　少女A　18
もうひとつの高校野球　軟式野球部主将　19
This is my Jichikai　荒井優子　20
What is "Jichikai"？　スタジオ「Two-One」の星　21
高校生活―ある一面から　枯葉の露　22
MISBELIEF　由利　27
恋愛論―思いの丈　立花亮　36

自分をみつめて 39

私にとっての今の自分　武林多寿子……39
ふりかえって　レディ・マドンナ……40
今の自分　No Brain……41

主張 45

今、世界は
無題　栗本直樹……45
自由作品
キタキツネより伝言―『教師って!?』―　喜田貴美枝……49

しいたく 54

近頃の若い者は　とは言うまじ　稲川正義先生……54
シルクロードの旅　近松淳一先生……54

文芸 58

循環　運命の奴隷……58
今、滅びゆく彼らのために　あんちえび……58
Special Delivery―特別航空便―　若原久美……59
大地　ピクリン酸……62
銀杏　上田達也……62
アルバムから　浅川祐俊……43
今思い出すとき　山本一樹……44
現在の世界―利己主義について　竹内尚寿……47
文学のもつ可能性について　中瀬祐美……51
思いつくままに　伊藤精幸先生……56
分裂症　ヘヒホハフンフン……63
僕の今　藤上英裕……64
白い題　ザ・E=mc²……65
シュワルツシルトの特殊解　K・N……66
Can you assert that they are wrong? CATII……67
編集後記　69

表紙　一年七組　岡村度子

"心辺"雑記

後期自治会会長　梅田一成

及時当勉励　　時に及んで当に勉励すべし
歳月不待人　　歳月　人を待たず

この一節は、「人生の充実のために若いうちに努力しよう。」という意味だが、何も勉強のことを言っているのではない。この漢詩全体のテーマは、「人生ははかない、若いうちに大いに酒を飲んで楽しめ。」という物である。この「勉励」を、「楽しめる時には多少の無理をしてでも楽しめ。」とも読める。これは、何か原稿に使えそうな名言はないかとひもといた一海知義著『漢詩一日一首』と『漢語の知識』による解釈の要約である。別に未成年に法を犯せと言う意図はない。

少年易老学難成　　少年　老い易く　学　成り難し
一寸光陰不可軽　　一寸の光陰　軽んず可からず
未覚池塘春草夢　　未だ覚めず　池塘春草の夢
階前梧葉已秋声　　階前の梧葉　已に秋声

これは学問をすることは簡単なことではないという詩である。独自の解釈を試みると、「まだまだ若い、時間はある　と思っているうちに時は過ぎ、気づいた時には老い先が見えていた。」後半二句はこうなる。一寸光陰不可軽に重点を置いて読むべきだろう。高校時代は二度と来ない重要な時期である。

ところで、大手前は伝統ある学校だが、そもそも大手前の伝統とは、長い間大阪城の前に先輩方の高校時代である「今」という時間を積み重ねてきた物だと私は考える。伝統を守るという言葉のもとに、先輩方の記した「時」をホコリもはらわず右から左へ移すことは、意味もなくただ「続いているから」という理由だけで事を行うのは、愚の骨頂である。私達はこの大手前の良き校風の上に新たなる時を、私達の「今」を積み上げていかなければならない。「今」という時を自分の目標に賭けてみようではないか。時流は刻々と移り変わって行くのだから。

とは言うものの、自治会も実状に合わない前世紀の遺物ではないかとさえ思える物を背負っている面がなきにしもあらずである。が、それが実際に弊害ともならないし、誰もそれを気にもとめない。これは事もなく平安な、裏を返すと生徒は無関心で活動は沈滞しているという証である。これは一朝一夕にどうこうできる問題ではない。「一将功を成りて万骨枯る。」という言葉がある。あえて本来の意味を無視して続けるが、将は功を成すためには万人を犠牲にする覚悟が必要であり、万人は将たる者をもりたてるためには、自らその礎となるだけの気概が必要である。万人にその気概を持たせるためには、まず魅力ある組織と魅力ある活動が重要な要素となるだろう。つまり、生徒が自治会に無関心なのを生徒だけの責任にはできないと私は思う。今は組織の基礎を固めている段階である。私自身の自治会会長としての「今」が、「功を成す。」となるか、「功成らず。」となるか、任期を終えるまでは何とも言えないが、いつの日にか万骨のうちの一つとなり、一将の功を支えることを期待したい。

一言通信再登場。今回題名「掲載できなかった原稿から」「大手前語録」

School Life

正門のこと・いろいろ

二年十一組　なるど　玲緒

入学案内などのパンフレットの表紙は、大抵正門から見た学校の写真。第一印象というものはそこで決まる。

実をいうと、中学校の三年になるまでこの高校の存在を知らなかった。家のすぐ近くの高校にいくつもりだったのが、急に、こっちにいけ、といわれたので、本当に何も知らないまま、願書の提出にやって来た。だから初めて正門を見たときに、「うわ、古い。」と思ったのが、まさに大手前の第一印象ということになる。

古いと思ったのも当然で、生徒手帳を読むと大正十二年四月に移転と書いてある。大正時代の女学生というと、矢がすりの着物に袴をはいて…としか思い浮かばない。おそらくそんな姿の彼女らが、真新しい正門を通っていたのだろう。年月が過ぎるにつれて、古ぼけていく門に、それだけの伝統が加わる。今や立派に古ぼけた正門には、立派な伝統の重みが感じられるのだ。そして、その重みが精神的に威圧感を与えてくれたのも事実である。今でこそ、あまり気にしていないが、入学当初などは門をくぐる度に、しっかりせな、と緊張していたものだった。(ついでにいうと、そのころはかなりノイローゼ気味だった。)

正門というのは、当然のことだが学校の入口であり、正門をくぐることは即ち学校生活を始めることなのだ。中にはいやいやながら通り過ぎる人もいるし、くぐりたくてもできなかった人もいる。それでも正門は、でんと存在していて、学生たちを呑み込んでいる。やがて卒業して、高校生活を思い出すときに浮かぶのは、きっと伝統を感じさせる古い正門のこともあるだろう。

数年のうちに校舎の全面改築だか新築だかが行われると、このごろよく耳にする。そうなったら、やはり正門も変わるのだろう。けれど、それだと大手前が大手前でなくなるような気がするのは、自分だけだろうか。何といっても、大手前らしさを一番感じるのは、正門の古色蒼然とした雰囲気なのだ。

余談になるけど、正門に向かって、真正面から真っすぐに進むと、あのでっぱりにつまずいて転びそうになるのよね。それが何やらこの学校での生活を暗示してるような気がするってわけ。そこな人、いかが思われますかな？

私はノーマルだ。

ふと想ったこと

一年六組　橋田和美

今、クラスを眺めてみると、一年六組のなかにはいくつかの仲良しグループができています。グループの人は休み時間になると、固まって話をし、いっしょにお弁当を食べ、たいていグループで行動します。私は、というと、どのグループにも入っていませんが、強いて言えば、どのグループにも入ることができる、それゆえにどのグループにも入れないという状況なのです。

私は中学のとき、堅実に日を過ごしたがために、はみ子にされてしまいました。一度はみ子にされるとなかなか理解してもらえず、また、家で勉強ばかりしていると思われて、よく皮肉を言われました。理解してくれる人もいるにはいました。けれど私の心はもうかたくなになっていて、うわっつらだけのつきあいしかできませんでした。私は、ただそばにいるということが友だちではなく、また、自分のことを洗いざらいぶちまけることが友だちではないとわかりました。そして中学で友だちをつくることはあきらめ、高校だけに望みをかけていました。

そうこうするうちに高校入試の日がやってきました。五ツ木の模試などで、見知らぬ人たちと机を並べて試験を受けることに慣れていた私は、そう緊張もせず、特別な感慨もなく、大手前高校生の一員に加わりました。クラス分けの日は遅刻してあせりましたが、教室に入って、ひととおりクラスの人の顔を見ると、同じ中学から来た男子が三人、中学は違うけれど知りあいの女の子が一人。でも、他の人は、もちろん知らない人ばかりです。誰もかれもが美人や美男子に見え、なんとなくひるんでしまいます。私が消極的なせいか、人に話しかけても、話が続かず気まずくなってしまいます。私の心は不安でいっぱいで、嫌われたらどうしよう、やっぱり私は友だちをつくるのが下手なのか、とそれだけが気がかりでした。けれど、今をのがせばチャンスはありません。私は、話しづらいな、と思った子でも、勇気をだして、あいさつをしました。ともすれば消極的になりがちな自分を、阿呆に徹することで克服しようとしました。そして、友だちづきあいというものを、少しづつ感じとりました。努力のおかげで、私はクラスの女子全員と仲良くなり、誰とでも抵抗なく話ができるようになりました。この喜びは口では言いあらわせないほど大きいものでした。このあいだまで、孤独しか味わえなかった子に、三人の女の子から、いっしょに遠足の集合場所に行こう、と誘いがあるなんて、考えてもみませんでした。このとき、私は、自分がクラスに融け込めた、と感じました。私は自分の性格を変えることができたと確信しました。そのおかげで、私は誰にでも人見知りせずに話しかけられるようになり、またいろんな行事にも積極的に参加するようになりました。

けれど、私はどこか一つのグループに入るといったことができませんでした。たった一人でもいい、何でも相談できる親友というものをつくることができませんでした。そして、何よりも、友だちはたくさんいるけれど、やっぱり孤独を感じていることに気がつきました。これは私にとって、ショッキングな発見でした。結局のところ、私は、誰にも心を開くことができなかったのです。顔をあわせ

あなたはアブノーマルです。

れば微笑んでおはようといい、休み時間に話をかわす、それだけのことでした。私は人に好かれたいとは思っても、人を好きになる努力はしていませんでした。私は冷めた目で、クラスメイトの一人一人を、この子はこんな子、あの子はああいうふうな子と、分析して長所は見過し、短所は許してきただけなのです。これでは、ほんとうに、うわっつらだけの友だちづきあいしかできるはずがありません。性格が変わったなんてとんでもない、表面は明るくなったけれど、深いところは全然変わってはいなかったのです。お互いに相手の長所を認め、信頼しあうのが友だちなのに、私は表面的なことに気をとられ、他人の長所を捜す努力を忘れていました。だからこそ一つのグループに入って、そのグループの人とより仲良くするなんてできなかったのです。

そんな目でクラスの人たちを見てみると、クラスの人たちは、本当に友人として信頼してグループをつくっているのかどうかという疑問が湧いてきます。ただ話が合うから、そばにいると勉強を教えてもらえるから、自分が犯した誤ちをすぐ許してくれるから、それだけの理由でくっついているのではないだろうか、と。本当に信頼しあってくっついている人たちなんて、本当に何人いるんだろう、と思います。これは今、私が冷めているがゆえの独断と偏見かもしれませんが、私は今、友だちというものに少し失望しています。言葉をかわさなくったって、そばにいるだけで、暖かい気持になれるそんな友だちは今、いません。なんとなく孤独を感じるのはそのせいなのかもしれません。これからは他人の長所を見つめるようにしたい、とは思います。でも、今の私の冷めた心ではできるかどうかわかりません。努力だけはしてみようと思っています。

私にとってクラスとは？

二年六組　**MOON－FLOWER**

〝クラス〟とはあなたにとってどんなものですかと、漠然ときかれると、返事には随分困ります。そのくせ、「今のクラスはいい？」「いま一つやな。」「一年の時の方がいい。」とかいう会話をよくするのですからおかしなものです。まあ、私もそのうちの一人で、根本がわかってないのに言うのもおかしいですが、一応私の今のクラスに対する考え方、クラスとはどうあるべきものかを、勝手気まま、独断と偏見で述べてみます。

我二年○組は、かなり個性的なクラスです。この〝個性的〟というのは非常にやっかいでして、その人数が多ければ多く、強ければ強いほど、それがよく感じる時と悪く感じる時があるのです。良い例は、話の内容に豊富なこと。（これはかもすると、うるさくなるのですが、まだ余りひどくないようです）クラス内で、様々なこと考えがわかるところです。悪い例は、その個性の強い同志がぶつかってしまった時、どうしようもなくクラスが分かれてしまうこと。私の見るところでは、我クラスはこれが出はじめているようです。しかし、個性的なわりには変なところもあります。H・Rでは意見がほとんど出ないし、あまり率先してやろうという人もいないのです。今年の体育大会の応援もかなり、大変だったのですから。我クラスの特徴はこんなものですが、私にとってこのクラスは何ですかときかれたら、私は単に一つの〝区切り〟でしかないとしか言えません。居心地はよいのです。しかし、こう答えるしかできないので

我が師、我が友のあつき包容に感謝す。今，心に泉をもちて海原に出づ。

す。

私が思うには、クラスっていうのは、単なる〝集団〟でいいと思います。どんな集団にするかは、団員、つまりクラスメートの個性などの違いによりますが。

クラスでうまくいかないとか真剣に悩む人がいますが、私はそれは一種の被害妄想だと思います。その人の性格や、クラスの雰囲気もそれぞれでしょうが、それにしても方法は二つしかないと思います。クラスの中にあわせるか、自分の気持ちを貫くか。個性のない人は、前者を選び、ある人は、後者を選ぶ（どっちでもない人は×××そんな人はない）と思うのです。又は、その二つをうまく組みあわせるか。私としては、たかがクラスのために、自分をなくしてしまうのはイヤですが。

そうです。大切なのは、やっぱり自分です。〝自分〟が、一人一人が反映されていないクラスなんて、それがただ一人でも抜けているクラスなんて、いくらまとまっていたって、一部の人が楽しいと思っていたって、クラスとは言えないと思います。

この機会にみんなも考えてみて下さい。「私にとってクラスとは何であるか」「クラスにとって私は何であるかを」でなく。

ある日　ある時　あるところで

三年八組　**ねむの木の精**

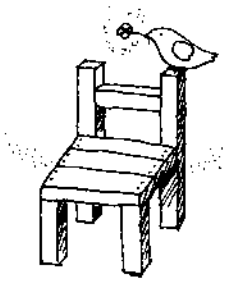
ああ、今日はいつもになく気分がいいわい。空もからっと晴れて、ほれ、窓からさし込む光も、あんなに柔かい。どこから入ってきたのか、小鳥たちも、えらくはしゃぎまわっておるわい。考えてみれば、わしにとっては、一日のうちで一番心安まる時間かも知れん、この「放課後」というやつは。

思えば、わしは、気の遠しなる程長い間、ここでこうしてじっとしておるが、その間、ほんにこれといっておもしろいことは、何も起こらんかった。というのも、今、この場所から見えるものと言えば、目の前の五十ほどの机と、正面にわしと同じく鎮座しておる同僚、それに、両側にある窓の外のほんのひと握りの風景ぐらいかのう。まあ、明日の朝にでもなれば、また、にぎやかなこわっぱどもがやってきて、あの熱い視線で、半日わしを見つめてくれるんじゃろうが……。おや、誰かこっちへ来るようじゃ。さては、机の中に弁当箱でも忘れたかな。

「ごめん、ごめん。私、時々やってしまうねん、こういうこと。」「ほんま、あんたらしいわ。いい加減こっちも慣れてしもたけどな。」「あった、あった。これがなかったら、明日は昼ごはん抜きやからなあ……。どうしたん、ぼけっとして。」「あのな、今ふっと思ってんけど、クラスの結びつきって何かな？」「何を言うのん、突然。」「この教室がなかったら、クラスは成り立てへんのとちゃうやろか。」「それはちょっと、暴論とちゃうか？　大学なんかでは、クラスはあっても、そのクラスのH・R教室がないところもあるらしいし。まあ、この教室が、クラスをまとめるのにかなり役立っているってことは、確かやろけど。」「いや、私が言いたいのは、クラスの結びつきって案外もろいんとちゃうか、ということやねん。」「うん……。確かに、そう言われれば、そうかも知れん。けど……。」「クラブはその点、もっと中味の濃いつきあいができる。クラスなんて、所詮

私は大手前が好きです。だからこそ、失意のうちに卒業してゆきます。

〝お勉強仲間〟やんか。」「そら、学年の最初は、そういう要素も大きかったかも知れんけど、少なくとも今は、それだけのものやないと、私は思うねん。実際、あんたとは、いっしょのクラスになったことで、お互いに色んなこと話し合えたわけやし、他の人にとっても同じことが言えるんとちゃうやろか。」「そうは言っても、クラスの中の「人まかせ」気風は見逃されへんで。こう、なんて言うか、〝おいしそうな所だけかじって、後は結構〟っていう感じ。」「あるね、確かに。でも、そうでない『皆でやろう』っていう気持ちも、実は、誰もが持ってるって思うねん……。というより、そう信じたいわ。」「そうやね。色んな人がおるんや。色んな考え方もある。押しつけも遠慮も、クラスのためにはなれへん。結局、お互いに尊重し合うことが、一番大切なんかな。」「うん。よく考えてみると、あたり前のことやけど……。」「実行に移すのが、むずかしい。」「それに、答えは、一つではないやろうしね。」「そうやね……。ひゅうーっ寒くなってきた。そろそろ帰ろか。」「また、押しくらまんじゅう、みんなでしたいねえ。」「うん……。」



どうやら、また、もとの静けさに戻ったようじゃ。わしはこれまで、一人ぼっちだと思っておったが、本当は「クラス」とかいうもんの生長といっしょに、年を重ねてきたということになるのかのう。あの子らが出ていった後には、さて、どんな「クラス」のどんな子らが、その熱いまなざしを、わしに送ってくれるんじゃろう。

友人

一年七組　く　ま

友人についてどう考えますか。顔は知っているけど話はしたことがない、という人は友人とは言えないけれど、それではいつ、友人となるのでしょうか。どちらかが話しかけたその瞬間に友人となるのでしょうか。まあ大体そんなところだと思いますが、同性の場合はまあ、知っていて、お互いよく話をする、ということになると友人となり、知っているか知っていないかで、友人かどうかという切れ目があると思いますが、では、本題には関係ありませんが、異性となるとどうなるのでしょうか。話をする、しないの友人の切れ目はありますが、逆の切れ目もあると考えています。逆とは、このスプリングの課題作である恋愛、即ち恋仲（何か時代がでてますね。）とかいうもの。これは一体どうとらえるもの何でしょうか。さっぱり分かりません。というのも友人の延長上に来るべきものだとは思いますが、ひとめぼれ、という言葉には、友人とは別の路線にあるような気もしますし。この辺のことが分からないので、今は、恋愛というものを知らないと感じます。つまり決して、自分が恋する、又は愛する、とかいう言葉が使えないので、今だに、好き、という言葉で間に合わせています。ここの細かいところは他のところにあるであろう恋愛論に任せまして、本題に戻ります。

僕の友人にも、幾種類かありまして、マイコンを趣味でやっているので、そのやっている時にできた、マイコン友達、そして、勉強のこと、学校生活のことを話す、普通の友達、又、一番心を開いて

「人間って、けっこう悲しみや苦しみに耐えられるものなんですね。」

話せる、といっても冗談ばかりいってるけれどたてまえのいらない親友（旧友ともいえるかな、つまり中学校の友達）。他は先輩、後輩なんかも友達といえる…いえます。大体は四種類に分けれるのです。但し、同性、異性、全て含んで、です。何故分けれるかというと、友達の種類によって話す内容が大いに変わるからです。つまりマイコン友達に対しては余り自分の身の上の話は話しませんし、普通の友達にしても然り。但、兼ねた友達はいます。何といってもマイコンをやるきっかけは旧友がやっていたからですから。しかし、僕の心は単純だから、時によっては普通の友達に、普通だったら親友にしか話さないこと（好きな人のこと、余りないけれど、ふとした悩みなど）つまり、人に話されたら困るということも、自分が少し嫌に思う程度だからと話してしまいます。これは少し例外。

マイコン友達というのがあるのなら、他の趣味の友達もあるのではないかと思う人も多いと思いますが、他の趣味は、トランプ、将棋、囲碁、チェス、読書、卓球、ボーリング、野球などなど、普通の人なら、まあ大体やっているだろうと思われるものばかりで、一番とっつきにくいマイコンで、他の人ともそれが置いてある店で知り合ったという感じです。つまり、今、他にシュミレーションゲームに興味を持ってきたので、もしかしたらシュミレーション友達なるものが、主にゲー研（ゲーム研究同好会）の人との間にできるかもしれません（できつつある!?）。マイコン友達とは、名の通り、マイコンのことの他には余りしゃべりませんが、しかし、この趣味にはなくてはならない人ばかりです。

次の普通の友達というのは、大体クラスの友達が主で、あと部の友達、旧友で、野球とかトランプとかはよくやったけど、親友とまでは言えない友達。などの人です。まあ、普通の友達、といっても何しろ、話す機会が一番多いのはこの友達ですし、もの凄く大切な友達です。もし、この友達がいなかったら、学校生活はどんなものになるのだろうか。少し考えてみたいと思います。まず、話すこともしないし、みんなを少し警戒というほどではないにしても、本音を全くだせない。何故なら、本音なんかをだすと、あいつはあんな人間か、と、もう殆どあほ扱いされるのが関の山です。つまり、学校生活八時から五時、行き帰りをいれて七時半から六時までの十時間半もの時間を気を張りつめていなくてはならないなどと考えたらもう気が遠くなりそうです。これで、普通の友達の結論が大体でました。僕の半日を支えてくれている友達です。

三つめの親友についてはどうか。みんなそれぞれにひょうきん者ばかりだと思います。（時々、自分はひょうきんでない、なんていう人もいますが…）しかし、一番心が安らげるのがこの友達です。何といっても、殆どたてまえが要らない、もう自分の姿の殆どをさらけだしているので、秘密も余りないと思う（少なくとも僕はないようだけど…）。だから、逆にこの友達に会わなかったら欲求不満というか、マイコン用語で言えば心がクリアーしない、つまり、心にどんどんと網がかかってきて、ついには、精神面で参ってしまって…ということになります。つまり、大げさに言えば僕の心、良い面も悪い面もだけど人格形成を支えてくれています。人は一年草みたいに一年で枯れ、また次の一年は生えてくるけれどまた枯れ、ではなく、樹木みたいに、年を重ねていくごとに大きくなり、ずっと枯れずに続いていく、という幹、即ち、継なぎめの役をしてくれているのがこの友達だと思います。

最後は、殆どはたてまえで過ごす、ある意味では精神修養をしてくれている人と考えていいと思います。あえて友人、という中に入れたのは、やはり、完全に他人、というものではなく、やはり時々は友達づきあい、そして又時々、縦の関係ということで、です。

とにかく友人というものを整理してみるとこんな風になりました。僕は元来人を敵にまわす、ということはしないほうなので、嫌いな人もなく、たくさんの友達の中にいて本当に幸せだと思います。幸せに慣れると、とかく幸せとも感じなくなりますが、そんなことはなく、いつまでもこの幸せは忘れずにいたい、と思います。

最後に、僕の分類には、どういう訳か同性、異性の区別がないといいましたが、同性の場合は、どの方面にもいますが、異性の場合は、同級生の場合は普通の友達で、学年が違うと、大体はその他に入ってしまうのは、やはり、同性とは混ぜこぜにしてるつもりでもやはり、どこかに違うものを感じるからでしょうか。但、例外として、親友もいるにはいるのです。つまり、何でも言えて、遠慮とかを全くせずにすむ人が。

人は出会いの為にうまれたなどと聞くこともありますが、もしそうだとすると、僕なんかは素晴らしい人生を歩んでいるといえます。これからも、もっとたくさん友人をつくっていきたい、そう思う今日此頃です。

～We Love Friends !!

パートⅠ

二年三組　**大手前の姐御A**

友人について―こういう趣旨で書こうと思った。私には多くの友人がいるので何か書けるだろうと思い、簡単に引き受けてしまったが、いざ書こうとするとすすまない。（私は堅い文は苦手なのだ！）続きを書いてくれる（この原稿はRさんと二人で引き受けたのです）Rさんが「私が真面目な文を書いてあげるから、あんた好きなように書き。」と言ってくれたので、そうすることにする。友人は良いものだとつくづく感じる。

私のまわりには大勢の愉快な友人がいる。その親睦を深めることは、校外教授や修学旅行の目的の一つである（と思う）。その点で私は修学旅行の目的を達成できたと言えよう。何しろ五日もみんな一緒にいたのだから、本性も出る。バスの中で東京音頭を歌い出す子もいれば、ホテルで尻文字をやり出す子もいた。おとなしいと思っていたNさんが「おう」と返事をした。Tさんはいろいろ特技を披露した。夜は、布団にもぐり込んで心ゆくまで話をした。（先生すみません）あまり個人的な話をしたことのない子に相談にのってもらったりして嬉しかった。とにかく修学旅行は、友人について多くの収獲を得た。

こう書くと、友人とは一緒に楽しく騒ぐものである、と言わんばかりだが決してそういうつもりはない。クラスの仕事などをみんなで協力して行う時や、悩みに対してアドバイスしてくれる時、むしろそんな時のほうが友人のありがたみをひしひしと感じる。そうい

う事があるからこそ、友情が続くのであろう。

普段は意味もなく騒いでばかりいるが、私にとっていちばん大切なのは多くの友人であり、これまで私がやってこれたのも、学生生活の中で楽しい思い出を作ってこれたのも、多くの友人達の御陰である。これからも大切にしていきたい。

…以上、しょーもない文で申し分けありません。

紙面が埋まったので…Rさんに touch ☆

パートII　二年三組　大手前の姑B

大手前高校に入学してもう二年になる。今、もう二年生も終わりだなんて信じられず、来年は三年生だなんて信じたくない。しかし時の流れとは残酷なもので、人の気持ちなどお構いなしに容赦なく流れていく。果たしてこの二年間で私の得たものといったら何があるのだろう。新しい知識。新しい友人。入学当時、クラスには知っている人など一人もいなかった。不安ばかりが募っていった。誰もが同じ思いだったと思う。それが今、振り返ってみてどうだろう、なんと多くの人の友達になったことだろう、と自分でも驚いている。無論その中には、ただ〝気が合う〟〝クラスが一緒である〟というそれだけの友達もいるのだけれど、しかしその中には、これから・生付き合っていけるような友もいるのである。人生において、ずっと付き合っていけるような友 ― Best Friend ― を見つけることは難しいと聞いたことがある。事実、私の場合、小学・中学を通しても、私を理解してくれていると感じられる人に巡り会わなかったのである。確か、現国の授業で〝裏切った、とか裏切られたとか、心からわかってくれる友達がいない、とか嘆いて、人に頼って生きていくのは、日本人ぐらいのものである〟と教えて頂いたのを覚えているが、私はまさしくそれにピッタリの人間なのである。自分を理解してくれる人間に巡り会わなかった、などという現国的に言えば実に嘆かわしい言葉を、口に出さずとも心の奥底でしっかりと思っているようなところがあるとは、どうも私は典型的な日本人であるようだ。話が少しずれてしまったが、私の ― Best Friend ― 達は常に思いやりをもって接してくれる。私は、というと、彼女達にはそれほど貢献していないのだろうけれど…。その中に今、日本を離れて異国の地へ勉強に行っている友がいる。彼女はとても優しい人間で、とても彼女の良さを一口で言うことができないけれども、私は彼女が好きだ。彼女との別れが近づくにつれて〝いなくなったら、私はどうなるのだろう〟と彼女の留学中の安否を気使うよりも、自分のことを考えていたなんて、今考えてみても恥ずかしいことであるが、それ程日増しに、彼女の存在が私の中で大きくなっていたと言うことになるのだろう。きっと、彼女達の誰と別れても、同じ様な思いをするだろうが、彼女の場合、特別であると言えると思う。五ケ月も彼女に会っていないのだけれど、身近にいなくなって一層彼女が好きになった。彼女が帰国した時、我々は劇的な再会をするだろう。いや、絶対するのである。ひとまわりもふたまわりも大きく成長して帰ってくる彼女との、その再会の日の為にも、私は彼女の友として恥ずかしくない様に成長を遂げねばならないと思っている。結局、感動しやすい人間である私には、友情も美論化されてしまうので、くだらない文章になってしまったけれども、最後に私は、この ― Best Friend ― 達を私に与えてくれた大手前高校に感謝しなくてはならない。

「勉強とは自力でするものだ。」　― *Leonard Medici Bundole*

我　愛する－Best　Friend－達よ
大手前高校よ
万　歳！

授業について

二年十一組　サマーセット　モーム

授業を受けるには、やはり、予習が必要であり、授業中はまじめでなければならない。これは当然のことである。しかし、私の場合先生から「もっとまじめにしなさい。」「もっと勉強しなさい。」といくら言われても、実のところ全く耳には、入らなかった。私には、授業というもの、勉強というものが自分の内にどれ程の位置を占めるものかが、わからなかったのである。

自分とは一体何なのか、何でなければならないのか、こういう疑問を持つ人は多いと思う。私もその一人であるが、いくら考えても自分の納得のいく解は見い出せず、現実的である勉強というものについて真剣に考えられなかったのである。

今でももちろん、前の問の正しいと思われる解を見い出したわけではない。しかし、生きようとするなら、やはり今を真剣に生きることが不可欠であろうと思う。

人それぞれ、考え方は異なるだろうが、勉強に対して、自分の納得のいく意義を、見つけ出せるものなら、早く見つけ出さなければならないと思う。そうすれば、スピードの速い授業も、量の多い内容もそう苦にはならないはず。又今までと違った苦を感じるだろうとは思うが、その時には頑張ろうとする気持ちが助けてくれるはず。とにかく今しかできないことをしてるのだから、一つ一つ授業を大切にするべきだと思う。もし授業はいい加減に、という結論に達した人がいるなら、授業をまじめに受けなくとも、人の邪魔をせず、静かにしているべきだと思う。

授業について、勉強について、生きることについて、誰が、どんな考えを持っているか、全くわかりませんが、こういうことを話せる授業もあればなあと思う。もっとすばらしい考えを見つけ出せるかもしれませんから。

行事　―文化祭について―

一年十組　山　崎　千登世

一言で行事と言っても色々あるので、特に文化祭についてとりあげて書いてみようと思う。

みんなは「文化祭」と聞いて最初にどんなことを思い浮かべるのだろうか。私はすぐにあの六月の梅雨空を思い出す。今にも雨が降り出しそうな、あのどんよりとした灰色の空だ。私達一年生は一度も二部を経験したことがない。一部終了真近になっていつも決まってポツリポツリと来るのだ。あの時程、雨が憎らしいと思ったことはない。「私達の学年はこのまま二部を経験せずに卒業してしまうのではないだろうか。」などと寂しい考えが浮かぶ。私はずっとあの

ファイヤーストームに憧れてきた。既に修学旅行で経験はしているが、また学校でするのとはやっぱり一味ちがうと思うのだ。一部に全力投球した後、夕日に照らされた校舎に囲まれて、クラスメートたちと肩をくんで歌ったり、踊ったり……。（ちょっと青春ドラマの見過ぎかナ?!）でも、やっぱりそういう情景に憧れてしまう。現実はそう甘くないことは充分わかっているのだが……。思い出がほしいのかもしれない。「ああ、あの頃が私の青春時代だったのかなあ。」と後で思える様な思い出が。

少々夢想めいたことを書いてしまったが、現実は本当に厳しいと思う。一部への全力投球なんて言ったが、あの文化祭にみんなは本当に全力投球しているのか、どうも疑わしく思われる。さんざん夢みたいなことを言っておいてこんなことは言いにくいのだが、全体に見てもう一つ乗りきれていない所があると思うのだ。乗りたいんだけど乗りきれない、そんな風に感じる。見る側にこう何かせまってくるものがないのだ。統一性がないということも問題かもしれない。一応、毎年テーマが決められる訳だが、どうも見ていてそれが浮き出て来ない。それぞれのクラスが自分たちだけで勝手にやってます、という風に見うけられてならない。それはそれでいいのかも知れないが、それならあのテーマは私達の文化祭にとって一体どういう意味を持つのだろう。

考えていけば色々たくさん問題点はあるものだ。前から言われている通り、時期的にも多少無理がある気もするし、又、生徒間の責任転嫁の傾向も認めざるを得ない。生徒である自分達がこの文化祭を作り上げるんだという意識が生徒一人一人の中にどれだけあるだろうか。要は「やる気」の問題だと思うのだが、なかなか口で言う程にうまくはいかないものだ。何しろ集団で一つの目標に向かって進まねばならないのだから難しい。

第一日目のことばかりになってしまったが二日目の舞台発表に関しても観客のマナーのことなどまだまだたくさん問題点はある。あげてゆけばきりがないのでやめておく。何か後半になって問題点の羅列みたいになってしまったが、何も良い所がないという訳ではない。長い伝統の中で受け継がれてきた大手前高校の文化祭の良さという物がきっとあるはずだ。それがどんな物かははっきりわからないが、やはり他校とは何かちがう良さを持ち続けてきたと思う。そしてそれをこれからも持ち続けなければならないと思うのだ。その中で改善すべき点は改善して一歩ずつ前進し、文化祭というものを自分たちの手で、青春の一ページとして綴るにふさわしい物にしなければならないと思う。積極的に参加して協力し合い、自分たちの納得のいく物を作り上げる。後にはきっと何かが残るはずだ。今そうしておかないと、大人になって後悔しそうな気がしてならない。

修学旅行

二年十組　北川好枝

私たちの修学旅行―それは、時間との戦いでした。だから思い出といっても、なんかうっすらとしかありません。でも、修学旅行委員として、本当にキャンプファイヤーを催しておいてよかったと思います。

私にとって、船に乗るのは、生まれて初めてだったので、船の中での様々の事上驚嘆するばかりでした。そして、一番感動したのは、

甲板から見た太平洋のどんより暗い海でした。こうして、修学旅行一泊目は、快適で、のんびりできましたが、下船を皮切りに、観光地の場面場面に感動もしていられないほど、ハードスケジュールでした。一番残念だったのは、長崎の国際文化会館で全部見聞することができなかったことです。私たちは、日頃原爆についての知識や理解を得ることがないので、本当にあのような機会にじっくり考えたり、私たちなりの意見を持ったりしたかったです。

次に掲げますと、大宰府天満宮です。庭の美しさに感動し、おみくじの学問の欄に声をあげたり。本当、もっとゆっくり見回りたかったです。

今、しおりを見ずにぱっと思い出せるのは、この二つぐらいです。ゆっくりできず、あわただしい修学旅行でしたが、さすがに、毎日つき合っていただいた、バスガイドさんや運転手さん方と別れる時は、涙が…。どこのクラスでも、多種多様な感動の場面が目に映ることでしょう。毎回の食事のにぎやかさ、ホテルの中でのおしゃべり。

本当にあわただしい修学旅行でしたが、新幹線に乗って棚に置いてあるおみやげの山を見ると、『あーあ修学旅行へ行ってきてんなあ。そして、もう終わろうとしてんねんなあ。』って思ってしまいました。天気も良好、安全にみんなが帰宅できて、本当に良い修学旅行だったと思います。

演劇への招待

二年一組　河野敏明

皆さんは「演劇」という言葉を聞いて、最初に何を連想するでしょうか。TVのドラマ・映画・好きな俳優など人それぞれでしょうが、舞台を連想する人は少ないと思います。しかし舞台俳優が映画・TVなどに出演することは簡単ですがその逆は一般に難しいとされています。舞台では多勢の人に聞こえるように台詞を言わなければなりません。しかしどなったりしては劇になりません。そこで腹式呼吸を利用した発声法、ぞくに『腹から声を出す。』ということをしなくてはなりません。それにぶっつけ本番、やり直しは利かないのですから失敗した時にはアドリブでつなぐことも必要です。このように舞台で劇を演じるというのは非常に難しいことなのです。

しかし世の中には難しい物に興味を覚えるということがあります。例えば様々な人が難解なクイズやパズルに熱中することと同じです。私やその他の部員の場合それが舞台で様々な役を演じることだったのです。確かに舞台の上で役を演じるのは難しいし、舞台に上がる前は、口でなんともないようなことを言っていても、本心はある種の恐ろしさでびくびくしています。けれども舞台の上へ立てば自分との戦いです。台本を渡されて、役をもらった時から舞台へ立つ直前までに自分が作り上げてきたその役の人物を、どれだけ自分の思い通りに表現できるかの戦いです。

役者がその勝負に勝ったか、あるいは負けたか、それを判断するのは劇を観ている人々です。もし観ていた人が「何も聞こえなかっ

富士には月見草がよく似合う。大手前には予備校がよく似合う。

た。」と言えば、役者はその勝負に戦う前に負けてしまっているのです。またそこで演じられた劇は死んでしまっているのです。

以上書いてきた様に口では立派なことを言っていますが、本当の事を言って自分自身、および演劇部の実力はとうてい以上述べた事がらに伴なっておりません。と言うと演劇部は何か練習してるのかと考えられる人も出てくると思いますので一部分を紹介したいと思います。まず最初に発声―これは腹から声を出せるようにするための練習で、あ～え～い～う～え～お～というふうに各言葉の最後をできるかぎりのばす発声と、あ・え・い・う・え・お・あ・お・と短く切って発声する二種類をやっております。そして次は早口言葉これに関しては別に説明する必要もないと思いますので、その内のいくつかを紹介しておきましょう。「東京特許許可局国庫局局員」上加茂（かみがも）の紙屋の孫兵衛か、下加茂の塩屋の孫兵衛か、上加茂の紙孫か下加茂の塩孫か。」などがあります。そしていつも最後にやるのは台本読み。これはその時の人数にあった台本を使ってそれぞれ役を決め、感情を出して読むのです。あまり自分も部長として注意しない方ですが、この時のアクセントだけは注意します。アクセントというのは分かりやすく言うと大阪弁になっているということです。その他のことはあまり注意しません。たとえ部員が自分の考えているのと違う表現方法を使って自分に「あれ？」と思わせたりしても、それはその人の個性だと考えています。

ところで演劇部の実態はと言うと、存在さえ知られていないというのが現実だと思います。劇を演じることができるのは、文化祭・文化系クラブ発表会・予餞会と三回しかないので当然かも知れませんが、めげずにこの三回の機会をできるだけ利用して演劇部の存在を知らせようと思っています。

基礎からの落語

一年九組　諸　星　あたる

最近の若者に「落語」といっても「ダセーな」とか「年寄り臭いぜ」なんて言われるかも知れない。しかし、それはスピーディでチンボのある漫才と比較してのことで、落語とは庶民の生活の中にある人情や滑稽なできごとを語る大衆的な芸能なのだ。そして我々、落語研究同好会は読んで字の如く、落語を研究し、演じるということを活動としている。落語は上方にも江戸にもあったが、噺の数では圧倒的に上方の方が多く、後になって上方の噺のうち、いくつかが江戸へ持っていかれ、今日の江戸落語の重要な噺になっているのだ。こんな由緒ある上方落語を、由緒ある大手前でできるなんて私は光栄に思っている。大抵の人は落語なんて嬉しがりでいちびりがするものだと思っている。その通りだ。それは落語の登場人物にはそんな人々が多く、虚栄心やつっぱった気持ち、羞恥心などがあっては噺を演じ切れないのである。自分が登場人物になった気持ちで心をこめて一生懸命やらなくては、観客とは一体になれないし、面白くないのだ。だから噺家はのんきでぼけーっとした人が向いているのだ。噺には大概、長屋のせっかちな男やのんきな男が出てきてストーリーが展開していく。噺の中心もアホな男であることが多い。こういう人物を演じるのは難しい。例えば「わい、このごろ冷えて

人はなぜ生きているんだ。

かなんわ。」「ほんなら体の内側からぬくめたらええねん。」「ほなカイロ、飲み込めっちゅうんでっか？」というやりとりの「ほな…」の部分を本当に飲み込まなあかんというような顔、言い方をしなければならない。これが簡単そうで実は難しいのだ。また悲しい場面では本当に悲しい気持ちで喋らなくてはならない。ここらは演劇と通ずる点がある。しかし、演劇との最大の相違点は落語は一人で演じるということだ。演劇の場合、一つの物語は数人に分担され造られる。また裏方さん等を含む共同作業である。しかし落語は違う。物語を語るのも一人で、大道具、小道具などは人体表現とせんすと手拭いで済ませてしまう単独事業である。だから落語はアドリブが効くし、自分の思い通りに噺を進行することができる。また反面、自分の演技を他人にカバーしてもらえない。ここらが演劇と落語の大きな違いである。

落語は伝統の芸である。ルーツは二、三百年前に遡るらしい。しかし現在語られている噺の数々は明治、大正以降に、昔からの噺を整理したものや、当時の新作を含めて大系化したものである。当時は民衆の常識とされた浄瑠璃や歌舞伎芝居、生活などを題材にしたものが多く、現在では理解しにくいものもある。例えば昔は義太夫を現在の歌謡曲のようにそらんじている人がたくさんいたし、四十七士を一人も間違わず言える人もざらにいた。しかし現在では義経千本桜はどういう話であるか、浄瑠璃とは何であるか、へっついさんとは何であるか知らない人が多い。だから噺も芝居噺なんかはだんだん語られなくなってきているし、他の噺でも現代風に手直ししてあるケースもたくさんある。従って落語は徐々にその域をせばめられているように思えるが、創作落語もまた盛んである。自分で考え、また他人が考え、自分が演じるこの創作噺によって、落語という芸は後世に承け継がれていくのである。

落語という芸は自己陶酔できる芸ではない。なぜならば暗唱と同じで、覚えていることばを引っ張り出し、演技をするだけで精一杯で、自分が自分の芸を楽しむゆとりがない。無理をしてもお客さんの顔を見回わして「ああ、あいつが来てる」とか「今日はあんまり笑わんな」と思う位で、場馴れした噺家を除いて、我々素人の噺家が噺の途中にアドリブを入れようとしてそればかり考えると思わぬ所で間違ったり忘れたりする。音楽などとはここらが違うのである。だから我々は語っている間は噺のことしか考えないので、自分のできはお客さんの〝ウケ〟で判断し、それが反省の材料にもなる。そして噺は一瞬の芸である。過ぎ去った失敗はとり消すことができないし、笑いは一瞬の喜びである。だから我々は一瞬をしくじらないように、一瞬の笑いが少しでも長く、多く存在するようにと練習をし、高座に登る。そして一礼し、噺を始める…。「しばらくの間、おつきあいを願います…。」我々は日頃練習を重ねた噺を始める、だんだんお客さんが馴れてくる。ここらは笑うところだ。笑ってくれるだろうか。「クスクス」あ、ややうけたぞ。次はこのペースで…。「ゲラゲラ」「ワッハッハッ」この笑い声が我々にとってはどんなに嬉しいものか。青春をかけて語る噺はうまくないかも知れない。でも一生懸命やれば下手は下手なりにおもしろいものができると信じて我々は語る。たとえお客さんが居なくても、お客さんが笑わなくても……。そう、もっと練習して、もっと上手く、もっとおもしろい噺を語ろうと我々は心がけている。だから、今度から、落研に来て無理をしてでも笑って下さいね。

人は何かを残して去ってゆき、何かを得にやって来る。

ピン球を追って

二年二組　少女A

皆さんの卓球部のイメージといえばまず「怠慢卓球部！」が頭にくるでしょう。しかし卓球部も他のクラブと同様、友情や苦しみ、喜びを感じる青春の場なのです。

私は高校に入って初めて卓球というものに触れました。だから卓球に憧れていたわけでもなんでもないのです。ただ妹が卓球部に入ったからという極めて単純な理由で卓球を選んだのです。一年の一学期は毎日毎日基礎練と素振りばかりで、ピン球に触れるとしたら先輩のピン球拾いのときだけでした。こんな日々の中、公式試合に一年も出ることになりました。出る人はもちろんほんの数人の経験者で、私にはいやないやな素振りしか待っていませんでした。試合の前日の土曜日は一時から五時までの練習で、一時間ぐらい基礎練をした後、試合に出る一年がポンポン打っている姿を前にして三時間もただひたすら素振りをするのでした。「くそー、いつまで素振りやらすんや！」と心の中で叫びつつ、表面では笑顔をふりまいてピン球を拾うこのつらさ！　言葉では言いつくせないものでした。

それからもう一つの私の試練はマラソンでした。大阪城が学校のそばにあるばっかりに毎日外堀を先輩にお尻をペンペンされながら走らなければならなかったのです。というのも何を言おう、私が振り向くとかかさず誰もいない状態だったからなのです。どんなにもがいても一番うしろから脱出することができませんでした。時には「なんでこんなに遅いんやろなー」と走っている横で先輩に言われて泣きそうになったこともありました。「もうあかん、もう走られへん！」と思いながらも一止まったらあかん、止まったら負けや、そんなやつは女ちゃう、くさった女や！」と勝手に励ます言葉を考えて必死に走りました。それでもいつもうしろから走ってくる足音は、聞こえてきませんでしたが、一度も止まらず走ってきました。

先輩も引退して一年だけのある日、いつものように「また一番うしろやなー」と思いながら走っていました。半分を過ぎると「なんか今日は足が軽いなー」と思い、それと同時にすーと前の二、三人の横に並んで、いつの間にか私は彼女たちに背を向けることができていました。そして最後ダッシュしてゴールに着きました。そのときの感激といったら……　もううれしくてうれしくてたまりませんでした。「あのとき止まらんで走ったからやなー」「やっと努力が実ったんやな！」と思いました。その後まん中を維持することができました。

このころからだいぶ卓球の技術面でも大きな伸びが見られるようになりました。先輩が引退してからは一年の間で恐ろしいほど腕を競い合うのです。卓球の本やテレビを片っ端から見、毎日の練習の反省や新しい技術をノートに細かく書き、次の日の練習法を考えます。スマッシュが入らなくなったら基本にもどり、鏡に向かって素振りをやり直したり、上手な人のフォームを見たり、先輩に相談したり……まだみんなが未熟なので一年同士ではたいしたアドバイスもできず思わぬスランプに頭を悩ませました。とにかく毎日明けて

も暮れても卓球、卓球……そんな中で一年半が過ぎました。

卓球部は十月の半ばで引退ですから、この短い期間で初心者が技術を身につけるのには相当集中した練習をしなければ試合にも勝てないのです。試合には技術面はもちろんですがプラス精神力が必要なのです。第一にはあがらないことですが一年半の間の数えるほどしかない試合ではどうしてもあがってしまい、力がほとんど出せずに負けてしまうことが多いでした。しかし引退間近になるとだいぶ試合にも慣れ攻撃パターンもつかめ、「さあこれから」というときに引退なのですからとても心残りです。

私はもう引退しましたが、今思うと、この一年半の間実に卓球のことばかり考えていたなぁーと思います。毎日クラブするために学校に行っていたのですから……でもこれが青春ではないのでしょうか。

もうひとつの高校野球

一年十一組　**軟式野球部主将**

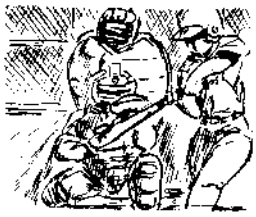
「軟式野球とソフトボールってどう違うのですか。」と質問された事があった。軟式野球は硬式野球とルールは全て同じで同じ高野連に加盟していて扱うボールが硬式の使用する硬球と異なり非常に変化に富んでパワー力の差が硬球ほど顕著にでず公立校向きの軟球を扱います。しかし硬式の様にマスコミの話題に余りならないけれど高野連の御偉方のおっしゃる「高校野球の原点である素朴さ」がそこにあるのです。

中学時代の友達が三人入部したと聞いて入ったものの先輩達は中学時代四番エースとかリトルリーグのサードとか圧倒される人も多かったが反面練習嫌いな人も多く、昨年府下ベスト十六のチームの練習量としては少ないなあと思った。しかし夏の大会前まで連日の大阪城グランドでの練習は苦しかった。特にO先輩の個人ノックは「酔いどれノック」と呼ばれ右に左に止むことなく鋭い球が飛んできてそれが気のむくままに続くので恐れられた。しかし練習の終った後の先輩を交えた雑談は汗をかいた後の心地よさも手伝って大変おもしろく爆笑が絶えなかった。そして夏の大会秋の大会と不運にも強豪と対戦し力及ばなかった。

そして冬が過ぎ春がやってきた。新チームが結成され僕は主将に任命された。僕みたいなのが主将をやって大丈夫だろうかと思ったが元来自主的なクラブなので部員一人一人が自覚をもってやってくれるのでなんとかやっていけた。初めての公式戦である春季大会は試合慣れしていず敗れ、一学期が始まった。文化祭の準備などで自治会議長をしていた僕はクラブに熱が入らず夏も敗れた。夏休みOBが来て指導してくれ秋はなんとしても勝とうと頑張った。抽選でS校に決まると更に燃えていた。

試合当日。S校の門をくぐるのはこれで二度目。前回は惨敗したので大手前は成長したと相手校に見せようとマウンドに立った。そしてプレーボール。相変わらず迫力のある打線であったが好守で切り抜け二回には先手点をもぎ取った。しかし三回に二アウトから同点にされてしまった。五回も二アウトからランナーを出し逆点され、今一歩のところで打たれる力の足らなさを思い知らされた。そして九回の裏になった。両チームの失策などから高得点ゲームで進み、

四点差、しかし勢いはうちにあった。無死満塁。打席が回ってきた。ベンチを振り返ると顧問の先生が戦況を見守っていらっしゃりＯＢにころがしていけと指示された。一球目高目ストレートストライク。二球目ベルトより少し下のストレートが来た僕はゴロだけを考え叩いた、ボールは一塁へ速い打球でころがり、しまったと思った。が三塁の好走更に二塁ランナーの好走で二点加わり一死一三塁。だが後続は断たれてしまった。しかし僕には悔しさと言うよりも充実感が、百七十一球という投球数が物語っている疲労感とミックスされ、何ともいえない心地よさがあった。この名状し難い気分は他では味わえるものではなかった。



このように部から得ることはまだ多くある。他校の部員との交流やＯＢの方々の様々な方面にわたるアドバイス、特に「俺は高校時代野球しとったんや！」という思いは一生保ち続けるであろう。

だが「君等野球しに学校来てんやない、勉強しにきてるんや、体鍛える事はええ事やが勉強せなあかんよ。」この顧問の言葉の通り両立をしなければならない。そこで我部は短時間で最高の能率をあげる練習を目指しているが実際大変難しい、本校にはマウンドがないし、グランドが狭いので大阪城グランドまでバットやベースなどの用具を持って行かなければならないからです。（しかしこの移動時間に様々な会話や出来事が起こるのです。）しかしそのハンディの中から勝ち取るものを目指しています。

今はシーズンオフですが春に向けて和気靄々と合同トレーニング、自主トレーニングに励んでいます。

This is my Jichikai

一年十一組　荒井優子

「自治会」というと、「暗い」とか「陰気」とかいった印象があるようですが、中に入ってみると決してそんなことはない！と声を大にして言いたいのです。私が本部とかかわりを持つようになったきっかけは、一年の後期に予餞会の実行委員として、本部の活動に参加したことです。確かに、最初は非常に入りにくい感じがあったのですが、なじんでしまうと、たいへん魅力を感じましたし、予餞会が終り、実行委員会がなくなるとなると、何か残念でたまらなかったことを覚えています。つまり、「自治会本部」というところは、中に入るほど、中身を知るほど、魅力を感じれるところだと言えるでしょう。問題は、「最初が入りにくい」ということにあります。

では入り易くするために、本部は何をしているのかというと、「自治広報」の発行がそれです。「広報」とは、一部の人間の手で動かされている本部の活動を、全体のものにするために発行されるもので、本部の活動の状態を報告するべきものです。しかし、行事の結果報告に終ってしまうなど、「本部」をピーアールするに至らないのが現状です。又、一体何人の人がこの広報を読んでいるのでしょう。ここで一般生徒の「知ろうとしない」態度が問題となってくるのです。

本部が、数多い行事の準備などといった事務に追われて、一般生徒に対するピーアールが十分でないのは確かですが、それ以上に、

時間よもどれ！　楽しかったあの頃に。（By Aki Iguchi）

一般生徒の「知ろうとしない」態度が、目につくのです。これは学校生活において「自治会活動」が欠かせないものだということの認識が無いことを、証明していると思います。「知ろうとする」ことの重要さを、考えてもらいたいと思うのです。

What is "Jichikai"?

二年一組　スタジオ「ｔｗｏ－ｏｎｅ」の星

「自治会について、書いてほしいんやけど…。」

こう言われた時、ぼくは困ってしまった。文集に載せるような、いや、載せてもらえるような文章など生まれてこのかた一度も書いたことがない。ぼくの成績をよく御存知の方なら、ぼくにこの原稿をたのんだ方を、「人格を見る目のない人」と思われるかも知れない。しかし、この原稿をたのんだ方が女子である、と言えば、ぼくがこうしてペンをとっている理由も、登山部の一年生の連中なら、すぐに納得するでしょう。

前置きはこのくらいにいたしまして、さて、皆さんは自治会についてどのように思っているでしょうか。たぶん、一年生の人たちは自治会を「別世界」のように思っているでしょうし、二・三年生の人たちも「暗い」というイメージを持っている人が多いでしょう。

ぼくも一年生のときは、自治会を自分とはほとんど関係のない「別世界のように考えていました。しかし、皆さんが自治会を「ああ、また勝手に何かやっとるわ。」とか「ああゆうのは、やりたいやつにやらしといたらええんや。」と思うようになったのはなぜでしょうか。このように生徒と自治会が全く分裂してしまった理由は何でしょうか。その理由は自治会の仕事の意義にあると思います。つまり、自治会の仕事がほとんど行事の「労働」だけになりつつある、ということです。ぼくが自治会役員だったのは二年生の前期だけなので、自治会の仕事の内容は前期のことしかよく知りませんが、前期の仕事としては、まずバレーボール大会、次にコーラス大会、そして文化祭、体育大会、最後に後期役員選挙があります。どれも自治会が中心となってやってきました。役員の皆さんもとても苦労したと思います。ところが、皆さんはその苦労している姿を見て、「ああ、がんばってるなあ。あいつらがあんなにがんばってるんやから、おれらもちょっとは協力せんとあかんなあ。」とは思わずに、「ああ、何んで人のためにあんなしんどい思いしよるんやろ。」と思う人がほとんどでしょう。そして皆さんは、自治会の役員たちを単なる行事の準備係のように考え、自治会役員のそういう「労働」を当然のことと考えはじめていると思います。ですから、自治会に対して感謝とか協力とかを考えず、常に自分や自分のクラスのことしか考えないようになっているように思われるのではないかと思います。

そしてその結果として起こった問題が、あの「自治会解散」ということです。あの時ぼくは自治会内部の人間だったので、この問題に関しては、非常に主観的になっているかもしれません。しかし、こういうふうに考えている人もいるのは事実なのです。さて、なぜあのような問題が起こったのかをごく簡単に説明しますと、まず、前期から後期への引き継ぎの時期になっても立候補者がほとんどいませんでした。また顧問の先生方にも協力してもらいましたが、その成果もあまりないようでした。やはりこれも自治会への無関心さから出た問題でしょう。そこで、とうとうあいう事態が生じてし

まったのです。

さて、今はぼくは自治会外部の人間です。前期自治会役員だったから、今も変わらず自治会活動には熱心だろうと思う人もいるかと思いますが、そういう気配は全くなく、やはり皆さんと同じように自治会には無関心になってしまいました。他の前期役員のほとんどの人たちもそうでしょう。ですから、今では自治会への無関心さが当然のように感じはじめました。だからぼくも自治会役員の人たちが苦労している姿を見ても、あまり何とも思わないでしょう。現在自治会との直接的な関係がなくなって、再び自治会外部の人間という立場から自治会への無関心さについて考えみますと、よくわかりませんが、何となく自治会側に問題があるような気がします。もう少し時が過ぎれば、自治会がぼくたち一般生徒に興味をおこさせるようにしないからだ、と考えるようになるでしょう。つまり、ぼくも皆さんと同じなのです。もし、あの「自治会解散」ということを聞いた時、ぼくが自治会役員でなかったら、たぶんこう思ったでしょう。「あいつら、やる気あるのか。最後まで責任もって、ちゃんとやらんか。」そして、竹内君には、こう言ったかもしれません。

「もう一ぺん、おまえがやったらええねん。」

支離滅裂で、自分自身も何を書いているのかわからないような文章になってしまったことをお許し下さい。

高校生活——ある一面から

二年三組　枯葉の露

いま私たちが過ごしている高校生活。クラブ、クラス、友達、授業、定期考査やその他たくさんの行事など、いろんなものにかこまれて、まさに進行形といったところ。そんな中にいて、ちょっと気になることから話を始めていこうと思う。

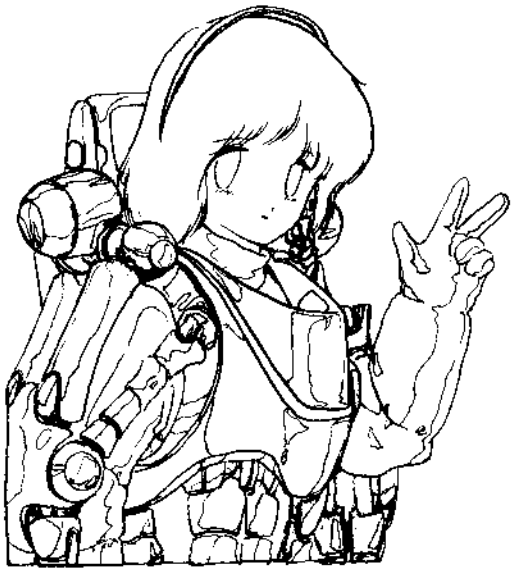
何かに向かって一生懸命がんばっている時、たとえそれがどんなにあわただしくても、たいていの人は、何かしら充実感のようなものを感じるだろう。こうした気分、言いかえれば、〝燃えている〟という感じは、だれもが経験していると思う。しかし、ふと、今までのことを静かにふり返ってみて、そこには何も残っていないような、時間だけがやたらと速く流れてきてしまったような、そんな気がするのは、私だけだろうか。この問、「今の生活を一言で表すとどういうものか」などということを何人かで話す機会があったのだが、そこで出て来たのは、「何かに追いかけられているような」とか「何だか圧迫されているような」というものだった。これを聞いて、ちょっぴり安心した。こう感じていたのは、私だけではなかったんだとわかったので。でも、何人もの人がこう感じるのはどうしてなのだろう。その答えは私にもよくわからないが、もしかしたら、そんなふうに追われているような気がするのは、毎日がすべき事でいっぱいであるために、はっきりとした自分というものを、つかめないでいるからかもしれない。自分がはっきりしないから、そのは

新しい恋で忘れられるような恋は、所詮恋であって愛ではないのです。

っきりしない自分がせきたてられているように思え、そんなうちにも時間はたってしまい、あとには何も残っていないように感じる、というように。

青春というのは、過ぎてしまってからふり返った時に、初めてそれとわかるものだと聞いたことがある。だから、よくわからないながらも、この今を（人それぞれ形はいろいろであっても）大切に過ごしていけば、きっとそれが、すばらしい青春、高校生活となるのではないだろうか。そんな気がする。

〝高校生活〟。考えれば考えるほど、大きすぎてよくわからない。ただ、いま私にできるのは、やはりベストを尽くすことだけである。そう、悔いのない高校生活のために。



前のカフェ・オ・レの方がおいしかったぞ！

いまみるゆめ

現代擬似小説

遠景

二年十組　康之

いつも恋をしていたつもりでした。でも今考えると、恋はたったひとつだけだったとも思えます。みんな忘れてしまっても、あの人の右斜め横顔だけは、心から離れない。

僕にとって時の流れとは、いったい何だったのだろう。五年の月日は、いったい僕に何をもたらしたのだろう。今、僕は、僕の心の底で静かに響いている声を、僕のもつすべての感傷をもって、懸命に聞こうとしている。冬はまた、巡ってきた。

寒い朝だった。僕は駅の階段を一段とばしにかけ下りていた。列車は、笛の音を残して出発した。悔しくてくずカゴを蹴とばした。その時、そのひとが笑った。みどり色のマフラーに顔を半分埋めてまっすぐに僕を見ていた。僕の心臓が激しく音をたてて鳴った。五年ぶりに見たそのひとの目は、あの頃と少しもかわらず優しかった。昔の恋…そんな言葉が、ふと頭をよぎる。いや、僕の心臓は、今、こうして鳴ってしまった。

教室にはそのひとと僕だけがいた。窓の下の池には、うっすらと氷がはっていた。春だというのに寒かった。そのひとは、みどりのペンをサラサラと動かす。僕は、そのひとの白い指先を黙って見つめていた。静かな、やさしいひとだった。そのひとは、たった一行〝元気で〟と書いて僕に渡した。ひとことも交わされず、沈黙のまま、すべて終った。

彼女は泣いていた。細い肩を震わせて、声をたてずに泣いていた。僕はあまりにも小さくて、彼女の悲しみもわからなかったし、彼女の肩を抱いてあげることさえできなかった。

「ママ、ママ、ナカナイデ。ボクガ　オオキクナッタラ、ママヲオヨメサンニシテアゲル。ボクガ　マモッテアゲルカラ。ダカラママ、ナカナイデ。」

彼女は絵のように微笑んだ。やはり何も言わずに。白い指で、僕の髪を撫でた。そうして僕を抱きしめたあと、つぶやいた。

「ヤサシイノネ。イイコネ。」

（夢？夢だったのか。）覚めてからも、僕はベッドに横になったまま、白い天井に、そのひとの姿を写していた。僕は、ぼんやりとそのひとを見つめていた。

「ここに、イスがあるわ。すわったら。」

「ここは、どこなんだ。それに君はどうしてここにいるの。」

「あなたを待ってたの。あなたも私のことを考えていてくれた。だから二人、ここにこうしているのよ。」

僕は、その部屋を見まわした。イスと、そのひとと僕。あとは、窓もドアも何もなく、ただ、まっ白な部屋だった。僕はどうやってここに入ったのだろう。

「言ったでしょう。あなたが私のことを考えていたからって。」
「……君は何してるの？」
「あなたを愛してるの。」
僕は、彼女と愛しあうためにここに来たのだ。彼女を、この部屋からつれ出してあげなけりゃならないんだ。
「そんな必要はないわ。私、このままでいいの。」
それには、とにかく窓をこしらえよう。僕は、学生服のポケットから、万年筆をとり出して、白い壁に窓を、窓辺に小さな花を描いた。そのひとは、哀しそうだったが笑っていた。そして、僕の胸のポケットに、その花をひとつ折って、さしてくれた。
「さあ、ここから出よう。広い自由な世界で、愛しあうんだ。」
「いいえ、私は外には行けない。ここにいさせて。」
「だめだよ、こんな狭いところ。」
「ここは広いわ、そう思えば限りなく広いわ。」
「でも、何もないじゃないか。」
これから、二人でつくればいい。花も果実も、何だってつくりだせるのよ。」
「夢みたいなこと言ってないで。さあ、一人で行こう。」
そのひとは、僕の胸で泣いた。涙が、ポケットの花にたまった。やはり、声をたてずに肩だけを震わせていた。僕はそのひとを抱きしめた。そのひとより、ずっと大きくなっていたし、そのひとを守ってあげられると思った。ひとしきり泣いたあと、そのひとは、僕の手を握りしめてうなずいた。
窓を割る音がした。目の前が赤く染まった。血？

僕は、はっとした。全部、全部夢だったんだ。そのひとが、みどり色のマフラーを巻いて立っていたのも、肩を震わせて泣いていたのも、僕を愛していると言ったのも、みんな夢だったんだ。それにしては、僕の手に残るこの感覚は何だろう。僕は、どうかしていたんだ。むしょうに濃いコーヒーが飲みたくなった。腹の芯から寒い。何か大切なものを、僕はなくしてしまったような気がする。
その時、ホームに急行列車が入ってきた。何となく見つめた窓にそのひとは、いた。僕を見て、確かに涙を流した。それから、静かに微笑んでみせた。僕は何か言おうとしたが、何も言えないまま、急行列車は行ってしまった。
僕には、君の痛みがわからなかった。
ふと、胸に手をやると、滴をためた小さな花があった。誰もいないホームに、みどり色のマフラーがおちていた。

今年も冬が来た。
僕はみどり色のマフラーを巻く。それは、肩に少しの重みを与え続けている。僕の手は冷たい。内には、何か不思議な感覚が残っているが、それは、僕だけのもので誰にもわからない。やはり冷たい。いつか、マフラーも、手の内の感覚も、夢だと気づく日が来るのかもしれない。

青春の宙ぶらりんの中で、僕は、僕の生きる方向も、君の胸の痛みさえもわからないでいる。
ひとつだけ、わかったことと言えば、僕は、やはり君の右斜め横顔が忘れられないということ。

僕はどうやら、あの人を、愛しているようだ。

曇り空

二年七組　英　光

それは、例えば、僕が僕自身を失くしそうになった時に見に行く海の色に似ていた。音もなく現れ、そして姿を確かめる前に消えてしまう、そういったひとときの幻だったのではないかと言われると返す言葉もない。しかし、僕にとっては紛れもない真実だった。

殺伐とした部屋の中で、彼女は別に何かをするといった風でもなく、ただ、手のひらの中で、透き通った二個のガラス玉をもて遊んでいた。気泡も、ひびもなく、ただ透明の何の変哲もないガラス玉だった。窓の外は曇り空で、光が入ってくるわけでもないのに、それは彼女の手の中で何故か光っていた。

彼女の髪が微かに揺らぐ。僕が斜めうしろからじっと眺める。どこかで見たことのある風景だった。僕は何かを予感して背筋が震えた。

彼女がそのガラス玉のひとつを空にかざすと、そこには確かにもうひとりの僕が存在していた。彼女はゆっくり振り向き、にこりともせずにガラス玉を指さして言った。「これ、君の？」

あまりに唐突な問いに、僕は首を横に振るのが精一杯だった。彼女は、そういう僕の態度を一瞥すると、また、ガラス玉を転がした。

柔らかな振動を伴う視線は、そうして僕の心をとらえた。窓の外は相変わらずの曇り空だったが、それさえも許せる気分だった。

その曇り空に何かが反射した、と思ったのは事切れるガラス玉の最後の抵抗なのだろうか。僕の気付いた時にはもう既に、ひとつは粉々に砕け、もうひとつは原型を留めてはいたが灰色にどんよりと曇って床の上に散っていた。僕はためらわずにその破片に指を触れた。傷つくことを知らない訳ではなかったが、不思議に何の迷いもなかった。

その破片は、極めて優しく、そして鋭く僕の心を刺した。心地良い痛みが体中に拡がる。きっと、これが、僕の望んでいたものなんだ――――それが過ぎ去った季節の証しだとも知らずに。

頭の芯がくらくらして、いつの間にか閉じていた目をふと開けると、僕は、まんまるのガラス玉をしっかりと二個握りしめて、いつもの教室の自分の席に座っていた。そして、彼女の姿なんかは当然感じられず、四限めの生物の授業が進められていた。

少しずつ明るさを増した太陽がいつか元の形に戻った。
切れた心の傷の甘い痛みも幾分か薄らぐ。
出て来るはずのない言葉には　気付かない振りを続けて
静かに訪れる眠れない夜は
耐えられなくて　はじけだす！

二人に共通したものは何ひとつとしてなかった。あるとすれば、以前のあの奇妙な一瞬とガラス玉だけだった。しかし僕の手のひらの中で暖められたはずの二個のガラス玉は、僕がフラフラと漂っている間にどこにいったのかわからなくなってしまっていたし、彼女

はいつでも僕より前の時間を吸収していた。また、僕は僕で、あとから追いかけるようにその時間を反復するしかなかった。それに、彼女が持っている時間は、僕のそれよりも短いために、もうすぐ、あの奇妙な一瞬すら過去に変わる日がやって来ることぐらいは、僕は悟っていなければならないはずだった。

旧い未来なら　ない方がいいに決まってるから
このまま　行き止まりまで　口笛　とばそうと思う
きっと　みんなに似合いそうな気がするのは
心をしぼった　トマトジュースみたいな、色、さ　！

僕の記憶の中で、冬が好きだったことなんて一度もない。それは曇り空の灰色が汚くよどんで見える所為だ。曇り空が別に好きだという訳ではないが、炸裂する太陽よりは、多分好きに違いない。
そうして春は静かに終わりを誘う。彼女も僕もこのまま春に流されてゆこうとしている。今は、ただ、それを黙って待つことしかできないが、果たして、これを恋と呼んでも良いのだろうか。

MISBELIEF

一年九組　由　利

ずいぶん歩いた、気がする。月のウサギにあげるはずの、天土星のカボチャの種を持って出掛けたのはいいが、なんと遠いこと。月のウサギってどんなだっけ？たしか図鑑に載ってたのは……。
図鑑に載ってるわけがない！
幕末の京都から函館まで、私を走らせたのは何だったろう？だんだら染めを翻し、ひたすら駆け抜けたあの時代。遠いものへの憧憬でか、久し振りにすれ違った誠の旗がうるんで見えた。

しかし、本当に遠いこと。

街道筋には茶店があって、近くに川が流れていた。でも渡しには誰も乗っていなくて、船頭が水の中につっ伏していた。毛氈が赤いのは、血のせい、か。

どういうことだろう、いったい。

次の瞬間には、もう追いかけていた。青い空気に沈んだ人が、水泡をもて遊ぶので。あれは確かに月ウサギ。行きつくところが水牛の群れなら、そこには娑羅双樹もあるかしら？

そうして私は出掛けたのだけれど。

雨の夜にはどうしても、待ち切れない空から月が落ちる。私自身電話が鳴り止んで走れなくなった。早くカボチャの種を届けてあげたい。何もわからなくなった。ここが、私のいるところ。

ただ、バスルームで死なせてあげる　と　白嘲めいた、高笑い。

座談会 おとなとこども

日　時…昭和五十七年十二月二十五日（土）
場　所…会議室
出席者…一年・熊田達哉
　　二年・尾崎博子
　　野崎恵美
　　竹内尚寿
　　上野威子
　　安井　潔
司　会…二年・河野綾子

☆大人とは？子供とは？☆

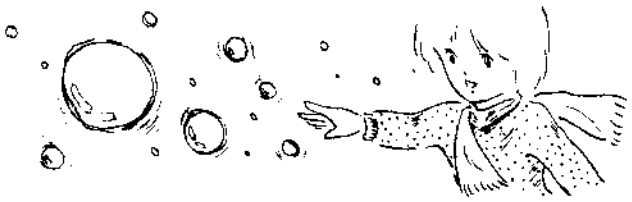
河野　まず今日の題は「大人と子供」ということで、まず大人とはこういうもんだと思う、そして子供とはこんなものだ、自分は大人と子供のどっちに属しているか、ということを言ってもらえませんか。

熊田　大人とは―子供を育てる人、一般的に言うと社会を形成する人。それで子供とはこれから自分を確立して行く人。だから自分というものを完全にはっきりわかっていない。僕はどっちにはいるかというと自分というものが完全にわかっていないからまだ子供だと思う。

安井　大人って言えば妙に世の中を知りすぎているような、そんな感じがするね。良く言えばいろんなことを知っているから「老成」している、という感じ。子供っていうのはその逆でまだ物事をあまり知らないから自分の考えがまだしっかりしてなくて人のまねをしたり…。自分は割とさめている面があるけどまだ子供だと思う。

竹内　僕は大人が必ずしも考えがあるとは思わんし、子供が必ずしも考えが足りないことはないと思うから大人と子供は全くの別もんだと思うね。それで社会的に責任を負わなあかんのが大人で子供はその責任が大人に保護されているものだと思うなぁ。僕自身としては、どっちかと言われると困るわけ。建前としては子供だけどね。（笑）

尾崎　私は、そうやねー、最初に大人か子供というとどっちでもないね。子供に近いのかもしれないけど、もういい加減大人になりかかってるのかもしれない。嫌だけどね。それと大人っていうのは自分の世界を信じていると思うね。もう一つ人間には最後には「死」というものが待っているからそれを受けいれられる何らかの理由を見つけ出すということも大人の一つの条件じゃないかなと思う。それから社会的には「自分のことは自分でする」という人が大人だと思



う。いつまでも親にめんどうをかけていたらある意味では大人じゃないでしょうね。子供はその反対だろうけど特に「自出」というイメージがあるね。そんなに自分の責任を持たなくていいし。だけど私はもう完全に子供じゃなくなってるから子供のことがわからなくなってきてるのが寂しいことだなあ。

上野　大人っていうのは一般的には二十才を過ぎてから、て言われるけど…大人って悪い面ばかりじゃなくて私が思うのは人の苦しみや悲しみがわかってあげられる人ーそういう人だと思う。大人になったら社会に出て世間を知るやん。嫌なことも知ったりいろいろ経験積んできて「あかんな」て思うことがあっても「まぁええがなー」ですんでしまう。（笑）子供だったら「こんなんあかんやんかー」と言って通そうとするでしょう。それは正義感というのかな。大人も正義感のある人はいると思うけど、やっぱり自分を折らないとやっていけない時があるだろうし…私は子供ですね。何も知らんし、人の気持ちもあまりくむことできないし。

竹内　とすると大人とは「社会的大人」と「精神的大人」ていう二つの面があるねんね。「社会的大人」て言っても精神的に子供な人もいるし、その逆の人もいるけど。

尾崎　でも最近精神的に子供になりたいという人も多いんじゃないかな？

安井　いや精神的に子供になりたい、ていうよりは子供って純真だから「純真さを失

いたくない」ていうことで子供になりたいのであって「完全に何もかも」子供になりたいわけではないでしょう。

上野　でも「純真さを失いたくない」という時点でもう純真でないわけやん。そしたら、もう中学生でも子供ではない。

竹内　子供って「幼児的」というのと「物事を素直に受けることのできる純真さ」というのと二種類あると思うね。で子供から大人になる過程で「幼児性」がなくなったり「純真さ、素直さ」を失ったりしてくるわけね。

尾崎　「素直」ていうのは世間一般に認められた子供のいいところだけどある意味では「わがまま」ていうのかな。

熊田　心は子供のつもりでもまわりに「年くったんやから」と言っていじめられることもあるしなぁ。

竹内　そうそう、それが同時に素直さを失う原因になっているような気がせんでもないね。

河野　私はあんまり考えたことがなかったんですけど、みんないつごろから素直さとかについて考えるようになりました？

尾崎　小学校か幼稚園。

安井　おまえ病気か。（笑）

野崎　なんで？そのくらいから思い始めるものじゃない？

河野　そしたら、「自分が素直やったなぁ」と思えるのもそのくらいかなぁ？

上野　やっぱりそんなの思えるのは幼稚園ぐらいまでやわー。

野崎　それに私、親から「あんたは素直や」なんて言われたことはないもん。何か一言言うと「あんたはひねくれてる」て。

竹内　そういう点は意識せんかったね。僕も親から「素直じゃない」て言われてたし。実際今とあんまりかわってへんし。（笑）

熊田　幼稚園までっていうのはある点では自分の心をそのまま出して人づきあいができるというのでしょうね。小学校になってきたら公の場、というのかそういうので「建前」というのができてくると思うんですが。

一同　そうやね。（とうなづく）

上野　私は子供になりたいとは思わんわ。それよりさっき言ったような大人になりたい。それと物事をゆがめて自分の心に取り入れたりはしたくないし、人を素直に信じられるような人間になりたいなぁ。

河野　ふと思ったんですが…今まで言ってもらった大人像は理想なんでしょうねー。私も目指したいんですけど自信はありませんね。

尾崎　やっぱり理想やろうね。大人って言っても神様じゃないんだし。

安井　それに法律では二十才以上が大人、て定められているけど、三十才ぐらいの人でも大人、て言える人は少ないのとちがうかなぁ。

上野　幼児性から脱却してへん人いっぱいおるわー。（笑）

尾崎　今現在の体制では大人にならなくても生きていける状態だしね。

安井　せやけど、若い人達が幼児性から脱却してなくても社会がある程度成り立っているのは五十代、六十代の人達がしっかりしているからだと思うなぁ。永年生きてきた「重み」もあるし、筋が通ってるし。

竹内　僕らが十年二十年生きてきてもそれぐらいでは対抗できない「理論」というのを持っている。

上野　やっぱり世の中の苦しみを知っているからと思うわ。

安井　その人たちが社会の第一線から引退するようになってくると若い人達も除々にしっかりせざるおえなくなるし、いろいろ自分でやらなくちゃいけなくなるから大人になっていくだろうなぁと思う。

☆信念持ってますか？☆

尾崎　ところで、ある程度大人になってきていろんなことを考えるようになると、自分の信念とか信条とかを持たないと、いや持てないと本当の意味では「生きている」とはいえないのじゃないでしょうか。私達の中で「信念を持って生きているか？」と言われてはっきり「持ってます」と言える人は何人いてるのかな。

上野　私はそういうの持っているつもりなんですけどね。私はキリスト教徒やから、そういう観点で生きて行きたいと思ってるけど。

河野　私は持ってませんけど…「信念」てみんなどういうふうに見つけてくるんでしょうね。

竹内　見つけた、というよりも自分が今まで生きてきたその間にあったいろんなことで得た、という感じやね。僕の信念＝信じるところのもの＝は僕自身やね。何でも最後は自分自身にかかってくるからね。それで、信念を持って生きているということは精神的大人に近いと思う。

尾崎　私は…まだ信念を持つところまでいってないと思うけど、ただ自分が存在しているということ＝これだけは否定できない事実だと思う。

野崎　さっきね、上野さんや竹内君が「信念持っている」て言ったけど、私は信念というものを自分自身やキリスト教におくことは非常に恐しいというか、危険なことのように思うんですけどねえ。

熊田　だからそれは「狂信」が恐いということ？

上野　キリスト教に限らず宗教は人殺しを禁じているでしょう。それなのに宗教を信じている人々も戦争に加わったりして結局は教えにそむいていることになるやんか。それが恐いね。

河野　それとまちがった信念はね。例えば欲につながっているのとか、道徳に反したりする自分勝手な信念はないほうがましだと思いますね。

☆モラトリアム☆

河野　さっき誰かが言ってたように思うんですけど「子供にもどりたがってる人が多い、て。

尾崎　モラトリアム＝執行猶予。

安井　大人になることを猶予してもらうこと。

熊田　現代社会的に言いますと、子供が大人になることが遅れているということですね。例えば原始社会は獲物がとれれば一人前だった。だから八才の子供でもウサギぐらいはとれるし、もう立派に大人の仲間入りをしてたわけですね。でも今は獲物はいませんし。（笑）

上野　やっぱり文明が発達してきたからやろうなぁ。そうなるのが当然やわ。

安井　結局、昔は力がモノを言う時代やったからある程度力がついてきたら立派に参加できたけど、今の世の中は一本立ちするの

には知識をつめこまなあかんからだんだん社会に出れるのが遅れてきてるのやろうなぁ。

尾崎　モラトリアム、ていうのは社会に出るのを拒否している人間及び風潮でしょう。社会に出るというのは「大人だ」という実感がすることだし実際責任を負わされることでしょう。でもそれを避けるというのは…。

上野　でも今の社会、てすごく汚ないと思うねん。政治家なんかを見てたら。それで社会に出るのを嫌がる人がでてくるのとちがう？その社会を改革しようという意欲も持っていないし。

安井　やっぱりモラトリアム人間て苦労することが怖いのとちがうかなぁ。結局、原因は過保護やろ。

野崎　過保護で思い出してんけどな、共通一次が始まった時、鉛筆削るのに電気の自動鉛筆削り機を使いたいけれど会場にコンセントはありますか、て電話で聞いてきた親がいてるねんて。(笑)

安井　話それたけど、社会に出るのが嫌な人間がモラトリアム人間なら僕はあかんと思うな。

野崎　モラトリアム人間て社会に出るのが嫌なくせに社会に甘えて生きてるねん。単なる現実逃避なのかもしれんけどな。でも私は完全にそれを否定できないねん。

尾崎　あのさぁ、モラトリアム人間てまじめな人間が多いと思うねん、私…。

竹内　僕はまじめとかそういうのじゃないと思うね。

安井　自分で自覚して思っているねんけど結局そうなってしまっている。そうちがう？

上野　つまりなーモラトリアム人間て責任負うのが嫌やねん。私もそうやけど。

河野　なんで高校行くんか、なんで大学行くんか、て言ったら考えてみたらモラトリアムな面があるのとちがう？

上野　多分、あるやろうな。

野崎　高校の場合は体裁もあると思うねん。

安井　だいたい僕の場合は、高校来たり大学行ったりするのはモラトリアムな面じゃないかと思っててんけど、最近は目標が見つからないから大学に行ってそれでやりたいことを見つけていくというか、そんなふうに割り切るようになってきた。

竹内　でも僕はね、高校行くとき行こうか行かんとこか、て迷ったなぁ。他のことしょうか、て。

野崎　それは誰でも思うんとちゃう？

竹内　それで考えて計画もしてみた。けど実現しなかったけどな。

安井　つい最近までモラトリアムのこと誤解しとったな。

尾崎　何を？

安井　ただ単に大人になりたくないという意味やと思っていた。それで「僕も大人になりたくないなぁ」と思ってそれを認めていてん。だけど社会に出て責任を負いたくないというのなら認めたないな。

……

河野　それではもうそろそろ終りにしましょうか。長時間にわたってありがとうございました。

あなたの恋愛論

恋愛論

二年七組　角屋　タマ子

うちの学校って、つき合ってる子、多いんか少ないんか知らんけど、二年になって、やっぱ修学旅行の影響か、あちこちでだいぶ告白したんがあったみたいですなあ。

私の周りにも振られた子が何人かいるけど、いい子やのにな、と思う。でも、この学校で周り見てみたら結構、皆いい子ばっかりやと思うねん。…見た目はいろいろやけど。しゃーからさあ、振った子に告白した子の友だちが横から「こいつ、ええ奴やで」て言うても、大して効き目なかったんちゃう？

結婚はどうか知らんけど、恋愛はほとんどすべて偶然の連続ちゃうんかな。例えば、あたしが前手大輔って子を好きやとする。ほんで、何で大輔くんなんか、て考えたら、側にいてるうちに、何となく好きになった。というのが私の惚れる時のパターンですわ。そしたら、側におったのが川崎洋くんやったら、洋くんのことを好きになってたかも知れん、ということですね。それに、その側っていうのも、席が近いとか、委員が同じとか、その程度ちゃうかな？これは私が惚れっぽいから、というんじゃなく、皆いい子やけど、側で見てみなきゃ、どういう子か分からんでしょ。で、喋ったりしてる内にいい子やなって、他の子と大して変わらんのに思ったりして、好きになってしまうんですわ。大輔くんのこと好きになってから、大輔くんも特別に素敵でいい子って訳じゃないと分かっても、その時には別にどうでもよくなってるねんな。とにかく、私にとっては、いちばん素敵やねんもん。こんな風に思ってても、大輔くんが私をいちばん素敵なんて思ってくれるとはなかなか思われへんけど。

こういう具合に誰か好きな子がいてる時に、違う誰かから、「好き」て言われてもすぐにＯＫできへんと思う。というのも、こんな言い方怒られそうやけど、トランプでいうと「51」やってて、クラブで三枚集めたのに、後の二枚がでてけへん、て時に、ハートが三枚揃って出てきて、そいつらが、手元の三枚より有利ていう場合、ここまで待ってんしなぁ、どうしょ？ていうような状況やろ。いくらハートが自信持って出てきても、四枚で来たって、ちょっと譲れんとこなんですわ。けど、あたしもいつか分からんけど、大輔くんのこと諦めて、好き、ていうてくれた洋くんのことを好きになるかも知れへん。そのいつか、があさってかも分からんし、大輔くんがおらんかったら、すぐでなくても洋くんを好きになるやろなあ。そやのに、洋くんが（大輔くん、おらん場合）、今返事して、て言うたら、あたし、今は別に何とも思ってないしな、と考えてしまう。

男の子が振られんのはこのパターンが多いんちゃうかな。自分が相手のことに気付いて、好きになって、さらに告白するまでの時間を考えれば、その相手が自分を好きになるまでに、やっぱりその位

片想いはうぬぼれで始まり、自己嫌悪で終わる。（一女）

の時間がかかるってこと、分かる筈やし、も少し、落ち着いて待ったらいいのに、と思うけど。友だちで、バレンタインに告白して、春とか夏、とかに返事もろた子もあるし…ということは三か月に半年！（あたしやったら、そんなに待たせるってことはペケやねんな、と思って別の見男くんを見つけてる頃ちゃうかな？）。

ひえーこんなこと書いてたら、むっちゃしょうもないもん、みたいになってきたなあ。恋愛（なんか恥ずかしい熟語やで）がそんなキラキラ、ステキなもんとも思わへんねんけど、こらひどい、て感じですなあ。私がほんとはどう思ってるかっていうと……「好き」ていうのが、どのくらい好きやったら、そう言えるのか分らんねんけど、たぶんチューリップ開いてる時みたいに、胸と背中から、ドキドキが漂い出てくるような感じだと思うんですね。その人に、いろいろして上げたいことはいっぱいあるんやけど、その人には、別にこうしてほしいとか、あんまり思わへん。ただ、いつも一緒でなくていいから、「あの人のこと、好きやのん」て自信もてるようなつき合いをしたいなあ。それに、やさしい沈黙を共有できたら最高…つまり、黙ってても不安じゃなくて、別に話題を捜さなくていいワケ。

恋愛と結婚は別っていう人は多いけど、私は好きな人について、今言ったみたいに思ってるし、恋人もだんな様も私のいちばん好きなんなんだから、どうやって、これを分けられるというのでしょ。そして、たぶん、私はその人を結婚してからもずっと好きなんですわ。こういうの夢物語みたいに思うかな。でも、好きな人との生活やから、テレビドラマみたいに子どもを塾に追いやって、髪ふり乱して、好きなことやって、だんなさんの悪口言うなんていうのは、絶対いややねん。それまで求めなかった煩わしいいろんなことをその人に要求して、お互いを嫌いになってゆくなんて、ヒャーとんでもなあい！私がその人にお願いしたいのは、私もたくさんは望まへんから、私にもできそうにないことを要求してがっかりしないでほしいってこと。ああ、ひょっとしたら私の方が自分でがっかりするかもなあ、その人をがっかりさせたくないんやもん。

とかいう反面、そんないつも見えるようなとこにいてんのは、いややなあ、と思ったりする。だから、（これは絶対に夢物語だと思うが）二人の家を小さくていいから、二つもってですね、それぞれ別の家に住みまして、今日は私の家で過す日、明日はむこうの家で、ていう風に行き来するわけ。別に毎日会わなくてもいいんやけど、こうすれば、なんとなく私の嫌なパターンにならないんじゃないかと。しかし、この計画には、家に帰ったときに一人きりになってしまうという致命的な欠陥があるねんなー。そうです、私は寂しくならない為に、誰かに側にいてほしいから、結婚したいんですよ。困った。

いっやーしかし、相手もおらんのに、こうして今悩んでるのもなんやし、私の話はこれで終わろうかな。

電車の時間変えようかな、あの娘を好きになりそうだから。

ぼくの恋愛論

二年十一組　りありい

Ⅰ　〝人は誰だって愛を求めている〟

愛を失くしたとき
一番必要なものは
やはり　愛である
人は誰でも
心の片隅で
愛を求めているものなんだ

生きている以上、人を好きになることはあたりまえであると思うし、人を好きになれないなんて、まれに見る国宝のような人だと思う。

愛を失くしたとき、一番効く薬は、〝新しい愛〟と〝時の流れ〟。〝新しい愛〟は失恋の傷をいやし、〝時の流れ〟は全てを洗い流してくれる。けれど、ぼくのポケットには、ひとかけらの愛もない。あるのは空虚な時の流れ。ぼくには、時の流れは効かないらしい。新しい愛もつかめそうにない。なにげなく青春を生きているって感じ。今は、なにげなく――。

それでいいのかも知れない。この大人と子供の中間って所を生きているのだから。愛なんて、まだ早いんだろう。たぶん。けれど、難しい時期だからこそ、愛を欲しがるのかも知れない。

Ⅱ　〝別れ〟

恋とか愛とかいうものには、きまって〝別れ〟がついてくる。それがいつくるかは、二人の知ったことではないけれど…。

〝別れ〟

今日は君の誕生日
オレのポケットには白いハンカチ
――〝別れ〟のしるし
幸せになってほしい…

〝別れ〟なんてものは、きっと〝愛〟〝恋〟がもっている〝運命〟みたいなもの。

Ⅲ　〝片想い〟

こんなに好きなのに
君にこの気持ちを伝えられない
〝片想い〟っていうのかな
オレってダメな男だよ

〝片想い〟って、ドラマや映画では〝ロマンチック〟だっていうんだろうね。それに憧れている人もいるんだろう。けれど、自分の気持ちを隠してるなんていやだ。〝愛〟

赤い糸って右足の小指に結ばれているそうです。よくつまづかないなあ。

を伝える勇気もないけれど…。

〝片想い〟素敵なことば。そして、悲しいことば。〝片想い〟だと、一人だけを愛することができる。一人しか愛せない。

今、ぼくは〝恋〟している。〝片想い〟だけど…。ぼくの〝片想い〟は、いつまでたっても〝片想い〟。きれいな蝶になることはない。悲しい運命を背負ったままで…。

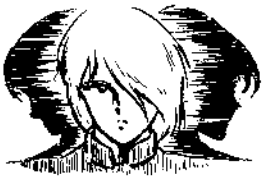
Ⅳ　〝恋愛論〟

男はさ
強がりばっかりいってるけれど
やっぱり
女のやさしさが欲しいもんさ
ただ
てれくさいだけなんだよ

素敵な恋愛をするというのは、だれにとっても憧れでしょう。

とくに女性なら。男性だってーぼくだって、素敵な恋愛をしたいと思っています。

だって今迄、ぼくがつかもうとした愛は、つかまえようとするとすうっと消えてしまうんですから。もてない男は、一度くらいもててみたいものです。



Ⅴ　〝想い出〟

これらを読むと、昔の〝愛〟の〝想い出〟が思い浮かんでくるでしょう。そして、想い出の歌・想い出の場所…。

さあ、〝新しい愛〟へのスタート。

愛は永遠に我々の友
我が身が滅びゆくまで

恋愛論――思いの丈（たけ）

二年九組　立花　亮

愛はいつの世にもある
愛はだれの心にもある
なのに
永遠の愛はどこを捜しても必ず見あたらない
愛はうつりゆくものと人は言う
諦めに似た気持ちで人は言う
人は無責任にも昨日を忘れることが仕事なのだから

恋愛とはいったいなんだろうか――人を好きになること――もちろんそれもある。けれど、結婚生活という恋愛関係を半永久的に続ける人がいることを考えれば、ただそれだけ？という疑問が残る。僕の好きな詩人は言った。「愛はゆるすことではないのか。自分のあらん限りの力をふりしぼって、ゆるすことではないのか。」そこで僕は考える。それではあまりに待ちすぎはしないか。僕は広い大き

現実はそんなに甘くない！（某男子）

な心で包むように信じることだと思う。それは、そう、果てしない海がそこで揺れる小舟を守るように。そのうえ、その信じることは小舟の生殺与奪の権を持っている。ひとたび、海が荒れくるうなら――信じることを捨てたなら、小舟はたちまちのうちに沈み、二度と浮いてはこない。つまり、愛は終わる。

こんな言葉もある。「まわりの人皆が敵になっても、一人だけは味方だと信じている。それが、愛だ。」「愛とは、利害打算を取り除いた感情だ。」そのとおりだと思う。いちいち〝ウンウン〟とうなづくばかりだ。愛は、それほどまでに厳しいものだ。どこかの評論家とかが好んで口にする安っぽいものなんかでない。というのは、人間の一生を左右するほどの重さがあるからだ。愛の言葉ひとつで、その人の生涯が決定される。ときには、その人の生命までも奪うことさえある。利害打算がないというのは、「車にひかれかけている子供を助けるために無意識のうちに飛び込んでいる母親」を考えればわかる。この例は、恋愛とは違う。けれど、そのまま、子供を恋愛の相手、母親を自分におきかえれば、恋愛になる。そこに、助けたから表彰されるとか、助けなかったから非難されるとかいう感情は、かけらもない。そのようなこととは無関係に、無意識のうちに飛び込んでいるものだ。それぐらい欲な事を超越したものが、愛だと思う。

愛は信じることだと思う。どういうことが信じることなのか？それは、相手の言葉のどれが本心で、どれが嘘かを見抜くことだ。その人の言葉ひとつであれこれ心が揺れるのは、

どこかでその人を信じていないのではないだろうか。人は、外面の姿や口に出す言葉を徐々にではあるが変えていく。けれども、その人の根底は変わらない。だから、その根底さえ信じれば良い。言葉のどれが本心かさえわかれば、その本心を信じれば良い。即ち、その人を信じることができる――愛することができる。

しかし、悲しいことに、信じることはあまりにも難しすぎる。これほど、つらく苦しいことはない。それは、根底が変わらないとはいえ、表面は断えず変化していて、いったい何が真実であるか見失ってしまうからだ。人間は変化するものに左右されやすい。そのうえ、目に見えないもの――真実なんかよりも、目にはっきりと見えるもの――風景の変化にすがりついてしまう程に人間は弱い生き物だからだ。人間は神（僕は神の存在を信じない。まして神がすべての事を知っているとは思わないが、ここではそういう存在だとしておく。）のように全能ではない。また、神自身にはなれない。どれが本当であって、どれが嘘であるかを完璧に見分けるのは、不可能にちかい。だから、この世から恋愛についての悩みがなくなってしまうことはないだろう。

人が恋をしているときは、美しいという。瞳が澄みきっているともいう。恋をすることで、心が素直になるのだろう。その素直さが全身にまで影響して、そのようになるのだろう。好きな人のことを考えると、それまでにあれこれと損得勘定をしていても、それらがすべて洗い流されて、心が透明になって、素直な気持ちになっていく。

永遠の愛をしてみたい。

失うものと得るものは
ときとして、このふたつの瞳に極似する
――右目は左目がなくては
　真実は遠いかげろうであり
　左目は右目がなくては
　　心情(こころ)は絵に画かれた風景である

失うもの、それは恋である
得るもの、それは愛である

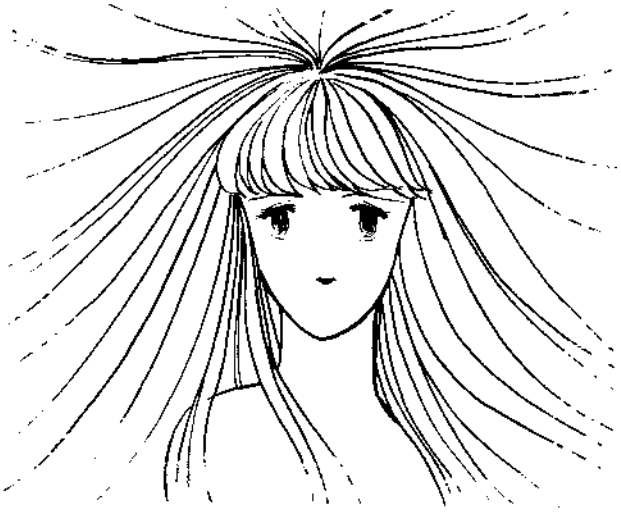
恋とは、多分に夢である
愛とは、少なからず現実である
――夢は虚構の中の現実であり
　現実は嘘と誠の妥協である

愛は、告白によって始まり
恋は、出会いによって始まる
――告白は賭けであり
　出会いは夜明けである

恋は、あこがれることであり
愛は、思いやることである
――あこがれはまだ見ぬ明日であり
　思いやりは今見送る今日である

愛は、歌であり、生命の鼓動である
恋は、詩(うた)であり、生命の誕生である
――歌は高らかに謳うものであり
　詩は密やかに唄うものである

ふたつの瞳はこの三次元空間を見わたすばかりでなく
　真実と心情をも見通す
すべては波うちよせる海に生まれ
　そして、銃弾の飛び交う大地に朽ち果てる



恋は、後悔とともに散り
愛は、裏切りとともに幕切れる

プラトニックラブとは、よーするに男色のことだった

自分をみつめて

私にとっての今の自分

二年五組　武林多寿子

今の自分とは？非常に難しい質問だ。先ず、自分とは何だろう。

自分。つまり、私と言う人間。一人の人間を完全に理解し説明するのは、不可能ではないだろうか。例えば私を例にとっても、姓名武林多寿子、年齢十六才。性別、女。大手前高校二年生。こんな風にどんなに多くの事実を拾い集めても、それらをつなぎ合わせて、私という一人の人間を作り上げることはできない。人間とは、それ程複雑なものなのだ。

自己を追求する。誰でもすることだ。だがなんと難しいことだろう。自分とは、最も身近で、最も遠い人間だそうだ。他人と言う未知の存在には、知ることによって共通点を見出せる。だがよく知っている筈の自分の内面には、多くの他人が潜んでいるのだ。自己を追求するとは、なんと恐ろしいことだろう。

自分を観察する。そこに矛盾を見出す。信頼できないと判断する。しかし、観察されている自分と、観察している自分とは、結局は同じ人間なのだ。どれ程違った性格が同居していようとも、それはやはり全体で一個の人間なのだ。そんな人間の下した判断を、信用できはしない。しかしまた、信用できないと言った自分も……。

私は長い間、こういう事を繰り返して来た。悪循環である。疑惑からは、何の結論も得られない。最近になってこの環をどうすれば断ち切れるのか、考えるようになった。

一つの答えは、愛情を持つと言うことだ。愛情にも様々な形があるだろうが、私の思う愛情とは、赦すことだ。赦すことによって、私は救われる。そして、私は、自分自身を追いつめることなく、全体を向上させることが、できるような気がするのだ。

しかし、この赦すと言う行為を、取り違えてはならない。甘えることなく、甘えさせることなく、自分を赦すと言うのは、他人に責められるより、余程厳しいことだろう。いずれにしろ、自分を知り自分を磨くと言うのは、安易なことではないのだ。もちろん、私には自信など、全くない。ただ、そうしなければならないのだ、と私は考えている。

ところで、今、とは何だろう。今の自分。簡単に言ってしまえば、十六歳の私。よく言われるように、十六歳の私は非常に不安定な状態にある。色々な問いを発するが、どれにも満足な答えを得られない。

また人生の一番良い時期、と言われることもある。そうかもしれない。三十歳や五十歳や、七十歳の人の気持ちは、十六歳の私には、到底わかり得ない。しかし反面、そうだろうか、とも思う。私たちはよく小学生を見て、あの頃は気楽だった、等と言う。言いはするが、けれど私は、まだそれ程苦でないその頃の自分にも、それなりに精一杯の悩みがあったことを覚えている。そして安易に「子供は幸せだ」等と、言ってはならないと思うのだ。

私はよく、今の自分は、自分自身のために、一体何をすべきなのか、と考える。十六歳の私が、と言う意味ではない。その時その時の自分が、と言うことだ。

現在は過去の結果であり、また未来は現在の結果である。これは私には、大変恐ろしい事実だ。

私は時々、とても不安になる。この事実に、いつも自分が縛られているような気がするのだ。現在のこの行動に対して、私は責任がとれるだろうか。そう考えると、身動きがとれなくなりそうだ。その時その時にしたいことをする、と言うのは刹那的無責任に思える。

しかし、私はまた、人間が本当に責任を負えるのは現在だけだとも思うのだ。過去、未来は、観念的に頭の中には存在する。けれど過去は既に結果であり、変わることのない事実となっている。また、未来には、確かに影響を及ぼすが、しかしその結果を確実に予測し、決定することはできない。

そんな風に考えると、私は結局、現在誠実である、と言うことが大切だと思うのだ。

その時その時純粋に必要なことをなす。その態度が真剣であり、謙虚であれば、それは決して、刹那的でも、無責任でもないと思う。

その時その時、最善を尽くすのが、最高の道だと私には思える。

人はよく、「あの時ああしていれば……」とか「先のことを考えると……」等と口にする。そう言って自分をごまかしたがる。でも、それは唯の口実だ。勇気のない現在の自分を、ごまかして楽になるための。

また「昔好きなことをしていたために、今は……」と言った話も耳にする。それも嘘だ。本当に好き、と言うのは、そんな簡単なことではないと思う。

私もそう言う人と同じように弱い。勇気がない、と言う意味でもだが、何よりそれを認めることができない。自分が弱いと言うことに気付かれないかと、びくびくしている臆病者だ。

だが、そのままでは何も変わらない。変えるためには、何かをしなければならない。そして、これまで書いたことを考えると、今の私のなすべきことは、自分をよく知ることではないだろうか。自分の弱さを認めた上で、最善のことを見極め、成し遂げる強さを育てること。そうすることで、いずれ、自分の過去に対して責任をとれる人間になれるのだと、今の私は信じたい。

ふりかえって

一年九組　レディーマドンナ

大手前に入学して、はや一年生の半ばを過ぎて、高校生活にも慣れた。予想していた以上に授業のスピードは速い。入学当時は、授業の予習に苦労していたが、今では先生方の特徴をつかんで、臨機応変に対応している。とにかく、高校生活のリズムを覚え、よい意味でも悪い意味でも要領よくなった。私の課題は「今の自分」だが、何を書いていいのかわからないので、今、私が感じている勉強、友人、先生、クラブについて書くことにする。

私は、時々文句を言いたくなることがある。「なんでこんなに勉強せなあかんの？」と。はっきり言って、私は高校を卒業すると、

以後自分が勉強しない科目は、ほとんどきれいさっぱり忘れてしまって、勉強したことが無駄になってしまうような気がする。今、私たちが勉強するのは、教養を高めるため、自分の興味のある分野を見極めるためなどであろうが、大学へ行くための手段だとは、どうしても考えたくない。しかし、勉強する目的が前者にあるとすれば、学校の授業は、あまりにも受験と結びついているのではあるまいか。

友人もたくさんできた。私が想像していた以上にユニークな人が多い。行事などに関しても、一生懸命にやる人が多く、文化祭の時などは頭が下がる思いがした。勉強もやっていないようで、みんながんばっているみたいだ。

先生も個性的な方が多い。授業にその先生の性格がよく表われている。何を言ってもうける先生、うけようとはしていないが時々うける先生、うけようと努力してうける先生、努力してもうけない先生、うけるってどころじゃなくひたすら授業に打ちこむ先生。おおよそ五つのタイプに分かれている。しかし、どの先生も授業熱心だ。こうしてみると、先生もいろいろな方がいらっしゃって、「やっぱり先生も人間だなぁ。」と思えてうれしくなってくる。

私は現在××部に所属している。中学の時も同じ部だったが、中学の時より、練習時間も長く、ハードである。入部してしばらくはほとんどトレーニングで、予想以上に厳しかった。一時はしんどくてやめてしまおうかと思ったが、やっぱり続けてよかったと思う。中学の時は女子の先輩がいなかったので、高校で初めてタテのつながりというものを感じた。先輩がしてくれる話は、私たちより一歩先を進んでいるようで、とてもおもしろい。

私は先に勉強について不満も並べたが、大手前はとても素晴しいところだと思う。今、本当に大手前に入ってよかったと思っている。大手前に不満しか持っていない人もいるかもしれないが、そういう人は、何か一つでも大手前に入ってよかったと思うことを見つけて欲しい。なぜなら、時間は、過ぎ去ってもう戻っては来ず、私たちは、常に「今」という時間に押し流されている。それに、何といっても高校時代は、人生の中でも特別に素晴しい時期であるが故に、とても短い時期であるのだから。

（支離滅裂な文章で申し訳ありませんでした。）

今の自分

三年六組　No Brain

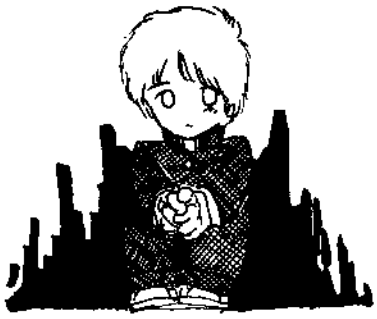
死ぬことは誰にとってもこわい。あたり前のこと。

ぼくが小さい頃（俺も昔は若かった……笑うやつは笑えっ！）、突然「死にたくない。」と言ってしくしく泣き出したことがあったそうです。本人には、全然記憶にないことですが、母親が言うので、多分本当でしょう。何故こんなことを書くかというと、実は、最近また、漠然とした、死に対する恐怖を抱いているからです。正確に言うと、なぜそんなにこわいかという理由が、もうひとつはっきりしないのです。

死とは全てが不確実な人生の中で唯一つ、確実なことです。そし

て、唯一つ、練習できないことです。人生の達人にはなり得ても、死ぬことにおいて、達人になり得るわけがない、と、どこかの本で読んだ覚えがあります。ぼくの尊敬する親鸞でさえ、死に際しては生に対する執着と、闘わなければならなかったのです。ぼくが、死ぬのがこわいと言う場合、何よりもこわいのは、死の瞬間、そして死に至る課程における苦しみです。ただ、こわいのです。

こんなことを、一人で考えているのは、いわゆる「病気」のようですが、ぼくは、これはいたって健康な心の動きだと思います。こわいから考えない、と思うほうがよっぽど不健全です。ぼくは、そのような人を責めているのではありません。ぼく自身がそのようですから。ぼくはただ、死ぬ間際にあわてふためくよりは、ある程度の心の準備ができていたいのです。避けることのできないものだから、それと堂堂とわたりあって果てたい、と願うのも、人間として当然の願望のひとつではないでしょうか。



思い上がったことを言うことを許してもらえるとするなら、人が一人死ぬことは、「自分」が死ぬことと同じだけの重さがあります。直接、間接にかかわらず、人の死に触れた時、ぼくは、その人の死が安らかであって欲しいと願います。実際、府警の前を通る時に、「昨日の交通事故死」がゼロであれば、ほっとします。ウラを返せば、これは、自分が安らかに死にたい、苦しみたくない、といった気持ちから出てくることです。死に耐えきれないであろう「自分」を思って、胸が痛むのです。人間は生まれたままの姿で死ぬとは限りません。戦争で亡くなった人達の話を聞くだけで、自分がそうして死んだら……と思うと、こわくてしかたがないのです。実際に腕の骨一本も折ったことのないぼくが、こんなにこわがることは、所詮は観念の中だけでの遊びにすぎないのかも知れません。死はそんな感傷を超越したところにあるのですから。

しかし、とにもかくにもこうして思い悩んでいる時、結局は姑息な手段で自分をごまかしてしまうことが多いのですが、十回に一回ぐらいは神に祈るような気持ちになることがあります。神に全てを委ねてしまえるなら、この悩みから救われるのですから。

ぼくは神の存在を信じます。でなければ、こんな不思議な生命が存在するはずはありません。そしてその不思議な存在である人が、人を愛するなんて、それこそ不思議なことのあり得るはずがありません。（それにしても……聖子大好きっ！）

科学とは、神を全面的に否定するものだとほとんどの人は思っているでしょう。その科学界においてさえ、最近は、宇宙を創り出したものは何か巨大な意志である、としなければ宇宙の成りたちを説明できない、とする考え方もあらわれてきているのです（この間、テレビである理学者がそう言っていました）。

とにかく、神の存在は信じられるし、全ての生命が神によって救われる、ということもぼくは信じています。にもかかわらずぼくは、ともすれば、「意識のないままに、苦痛のないままに死にたい。」と思っている自分を発見します。死について考える余裕もなく瞬時に

して消滅してしまえればいいのに、と願います。つまり、自分の死を見つめるだけの強さを自分に認めないのです。神に全てを委ねることができないのです。

敬虔な信者と呼ばれる人々がいます。神の御言葉に従って、仏の御心に従がって生きよ、と説く人々がいます。ぼくはあえて、そういう人々を糾弾したい。神の御言葉を知ろうとすることは、神に対する冒瀆だとぼくは思います。なぜなら、人間には人間のことはわかっても、人智を越えた神のことなど、はかり知れるわけがないのです。人間にできることは、自分の信じる正しいと思うことを行ない、よりよく生きようと努力することだけです。神は人間の判断する善悪などつきぬけています。全ての上にたって人を救ってくれるのです。いわゆる敬虔な信者とされる人々ほど、自分の判断の基礎を「神の意志」に置きたがります。そして、人にもそう信じ、行なえ、と説きます。彼らは、そういう態度がいかに神を侮ったものであるか、わかっていないようです。しかし、彼らはやはり、祝福された人々なのでしょう。なぜなら、彼らは神に救われることを信じきって、全てを神の前に投げ出しているからです。ぼくには、それがうらやましい。心が弱い故に最も神を必要としているのに、一方でそれを受け入れることを拒んでいる自分を省みて。

結局、答えは出ません。ただぼくにわかっていることは、今のぼくには、まだ、死ぬだけの価値もないということ。だから、死ぬまでは、生きて生きたおしてやろう、と思っていることだけです。未熟な自分でも書き残しておきます。

アルバムから

三年十一組　浅川裕俊

何かにイヤになったとき、あかんたれのぼくは、自分のアルバムを開けることにしている。

「おもいで」という金字が刻みこまれてある深緑色の表紙をめくると、なによりもまず最初に両親の感想欄が目につく。

父――産声聞ケズ残念ナリ。

母――男ノ子デスヨトイワレタガ産声モ聞コエズ、五体ガソロッテイルト聞キホットス。スコヤカデアレ。

その次のページには、手型と足型が二つずつ、ほんとうに小さくならんでいる。そっと重ねてみると、なんとかわいいことか。そして次のページからは、ようやく写真が展開されてゆく。一枚一枚の写真の下の〝一口メモ〟がまた傑作だ。

ぼくの一日

①なき　②飲み　③トイレット

④ごきげん　⑤わらい　⑥ねむる

頭をかきながら眺めているともう最後のページ。こうして次の巻、次の巻と、狭い部屋にアルバムを散らかしてゆくうちに、さっきまで憂うつだった心がもうすっかりと晴れているのである。

現在が空虚になったとき、ちょっと立ち止まって、過去のよき日日を思い出すということ、それはただ老人がするように、昔をなつかしむだけで終わるようなものではない。さらにもっと深い意味を

もっているのである。

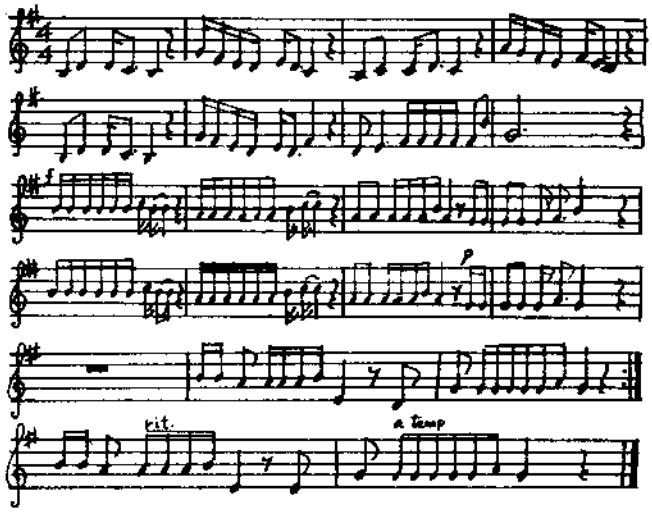
これまでの自分の歴史を（それはほんの二十年間もない短いものだけれども）ひとつひとつ、ゆっくりみつめてゆくうちに、何かが浮かび上がってくるはずだ。これこそ自分なのだという、その重みが、ひしひしと我が胸に伝わってくるはずだ。ぼくはこれを「生命」と名づける。

ぼくはかって苦しんだ。見るもの聞くものすべてに。そしてぼくは救いを求めた。世の数多き青年と同じように、人類の経験の結晶である書物の群れに。しかしながらどれもこれも、この憂うつな心のなぐさめとなるどころか、もっと暗い淵に落とされるだけだった。なぜであろうか。書物はあくまでも〝外界〟の冷淡な存在でしかない。「今をどう生きるか」などと題された哲学書があるが、それは、ある賢い先人の忠告でしかない。そういうこともわきまえずに、ただ書かれた内容を無理に自分におしつけようとばかりしていたからこんなに長い間、苦悩の下にあったのだ。

自分の「生命」との出会いこそ、今、必要である。
その尊き重みを、しっかりと受けとめて、
惑うことなく、力強く生きてゆこう。
自分の力で。これが真の孤独なのだろう。

今　思い出すとき

作詩作曲　山本一樹（1年7組）



1.
あの丘の公園で
楽しく遊んだあの日
それは　それは
もう昔のこと
白いブランコ　　まだあるだろうか
大きなすべり台　まだあるだろうか
（✱くり返し）
一人ふと思う　　今あのときのこと

2.
今ぼくは　未来へ向かって
みんなと共に　大きく進む
一歩一歩　しっかりふみしめて
後ずさりすることないように
確かに歩んだ　　過去の砂利道を
確かに見てきた　過去のおとぎ話を
（☆くり返し）
思い出すんだ　あの時を
今　思い出すとき

主張

☆今、世界は――

無題

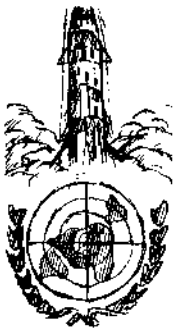
二年六組　栗本直樹

国際連合児童基金―ユニセフから先日報告がありました。『アジアやアフリカの子どもたちが、毎日四万人、飢えのために死んでいく…。』四万人といえば、大手前の生徒数が約千五百ですから、大手前二十五校分ぐらいの子どもが毎日毎日死んでいく勘定になります。朝日新聞十二月二十日付〝素粒子〟は、―アジア、アフリカにE・Tがいっぱい―と書いています。ろくに食べる物がない子どもたちの姿は、ガリガリにやせて骨と皮ばかりのその姿は、今流行のE・Tと似ているというのです。その子たちは僕たちや僕たちのまわりにいる子どもたちと同じ地球の人間なのにです。日本の―同じアジアにある日本の子どもたちは、TVゲームに熱中し、塾通いに忙しい小学生も、学校の窓ガラスを割り、先生に殴りかかる中学生も、受験に頭を痛める高校生も、少なくともそんなことはありません。事実、家庭や食堂のゴミには残飯や食べ物の残りがいっぱい捨てられてあるのです。日本では飢えて死んでいく子どもたちなんてほとんどないでしょう。そして世界には今日明日の生活にも困る人々が、何億何十億ともいわれるほどいるのです。日本の総人口の何倍もの人々が今の僕たちの生活からは想像もできないほどの貧しさの中にいるのです。言い換えれば、日本の今日の生活はその貧しさの上に成り立っているといえます。僕たちは、日本の人々はアジアやアフリカの子どもたちの人々の生活を踏み台にして、今の生活を維持しているといっても過言ではないはずです。

だから日本の人々はそういった人々に豊かな生活ができるよう犠牲をはらってでも援助していきなさいとは言うつもりはありませんし、また現実にも今のままでいきなりそういうことはできないでしょうし、僕たちもそのような生活を強いられることをだれも望みはしないでしょう。ただ、一日に四万人もの子どもたちが餓死していくこと、これは現実に今世界でおこっていることなのです。しかし僕たちのうちいったいどれくらいの人がこのことを知っていたでしょうか。このことを知ったとしてもいったいどれくらいの人が真剣に受け止めて考えたでしょうか。どれくらいの人がこのことをお互いに話し合ったでしょうか。

今、世界でおこっていることについて僕たちはいったいどれくらいのことを知っているでしょうか。いや僕たちはかなりたくさんのことを知っています。

世界は今各国とも長期的な不況にあること。米ソ両大国は核抑止理論をかさに核兵器の大量増備を行っていること。それに抗して、世界的に反核・軍縮の運動が盛り上がっていること。中東やイスラ



そんな君が好きだ（某詩人）。そんな君が代が好きだ（某国会議員）

ム世界で今なお戦いが繰り広げられていること。石炭や石油やウランなどの資源が減少していっていること。世界中の緑が急速に減ってきていること、ひいては砂ばく化が進行していること、今なお続く人種差別、深刻な対立が続く東西問題。貧富の格差をますます深める南北問題、全世界にひろがりゆくエレクトロニクス化、情報革命、果てしなく続きそうな工業化、その影で農業や牧畜・漁業がすたれていき、また自然は荒らされ、滅びゆく動物や植物、ひいては民族までも滅びゆくものがあるという。繁栄を誇る先進国は経済の成長率が伸びず、発展途上国はなお貧困の中にあり、人々はだんだんと複雑きわまるものになっていく世界に失望を感じる人も多いといいます。一方で未来をすばらしいものにしようと活動する人々もまたたくさんいます。今の世界はちょっとやそっとでは理解しにくいものですが、人々はみな懸命に生きているはずです。

しかし、こういった世界像というものは人によってかなり違うでしょうし、時として主観的なものに陥りやすいでしょう。僕の場合もまたそうかもしれません。ただそれにしても今書いてきたことはずいぶんと断片的な事実を列挙しただけで、その一つ一つのほんとうの事実を知っていることにはなりません。先に書いたようなことは、学校の教科書で習うようなことに似ていないでしょうか。例えば「東西問題とはこういうことで、現在はこのようになっている。」ということを習えば、一応表面上は今の世界の問題である東西問題について知っているということになります。でも真実の中身はそんなひと言で言えるようなまま易しいものでしょうか。何事でも本当のことを見極めようとするならば、もっと積極的な努力を必要とすると思うのです。

「今、世界は…」というのがこの文章のテーマであって、この文章はこのテーマで書いてもらうよう依頼されたのですが、「今世界はこうであるから、僕たちはこうしなくちゃいけない」などと書こうとは、この文章では思いません。今書いてきたように僕たちは、なるほど世界のことをいっぱい知っているけれども、それは表面を一通りサッとぬぐっただけのうすっぺらなもののような気がして、世界をうんぬんできるような力はないと思えるからです。まして僕たちの何倍もキャリアのある大人達が、あまたある国際問題の多くを手をこまねいて見ているだけという状態ですから、僕たち高校生としてはそれらの何一つ解決するすべは持っていないでしょう。しかしだからといって高校生が何もできないはずはなく、それはそれならまず世界でおきている一つのことでもいいから何かに積極的に目を向けて、その出来事の本当というものを見極めるような努力を普段からしていくようにしていきたいと僕は思うのです。僕たちが、教科書から借りてきたような一通りの知識しか持ち合わせていないのは、そういう見よう知ろう考えようという姿勢があまりにも欠如しているからではないのかと思うのです。常日ごろ、世界でおきていることがらに限らなくても、日本国内の様々な問題や身の回りにおきていることに至るまでもっと能動的な自分から進んで働きかけるような態度でもって目を向けるようにしていきたいものです。

この文章の文頭に、「今世界中で毎日四万人もの子どもたちが餓えで死んでいく」というニュースをもってきたのは、だから僕らの日本の食物をすぐさま援助せよというためにもってきたのではなく、

死ね。と言われて死ぬのか？、

ただこの文章を書くにあたって、ふと今のみんながどれくらいこのことを知っているかあるいは考えているか気になったからです。まずこの悲惨な現実に目を向けようではありませんか。そしてそれがどうしてそうであるのか考えてみようではありませんか。それでわからなければだれかと話し合ってみようではありませんか。そういった今の時代の蓄積はやがて大人の実社会に出たときにきっと役立つはずです。行動するのはそれからでも遅くはないのではないでしょうか。できれば今の高校生である時代にいろんなことを解決していく行動をみなが結束しておこせばこんなすばらしいことはなく、事実僕たちの同年代のみなさんが活躍した話も時にはきかれます。しかし現実には今一つ難しい今の世にあっては、僕たちはせめて目を向けて知りつくして考えて話し合ってという姿勢を常に持ち続けたいと思うのです。

「今、世界は…」この先はみなさん一人一人が自分の力でもって考えてみていったいどうであるのか一度みんなで話し合ってみませんか。

現在の世界

ー利己主義についてー

二年七組　竹内尚寿

現在の世界を考える時我々はあまりいい印象は持たないだろう。では具体的にどういう印象を持っているのだろうか。世間では政治が悪い、不景気だ、戦争が起こるだのいろいろ言っている。しかし何がそうさせ何がそう感じさせているのかはっきりした結論を持っている人は数少ない。又その意見の中にも責任を他におしつけた主観論も少なくない。日本を含む各国の主張も、利己主義的に感じさせる。しかし、そういった利己主義のみが人間の本質であろうか。

人間の利己主義は昔からよく言われる。芥川龍之介作の羅生門によるエゴイズムはよく知られ、今日でも人々に訴えるものは強い。彼の言うエゴイズムは、人間は死に直面すると何でもしかねないということであった。確かにそれは真実である。一般の人々から世界を担うような人でさえ、それを感じさせぬ者はいない。各国の戦争も本質的にはそれであろう。第一次二次の世界大戦、中東戦争、朝鮮戦争、並べればきりがない。又、現在もアメリカは日本に軍備増強を要求し、日本はほぼそれをのんだ。これも史上最悪の不景気に陥る国の利己主義に相違なく、要求をのんだ日本も政府の利己主義に違いない。これは高いレベルにおける利己主義だが、日常生活のレベルでもそれは感じられる。腹がたったらけんかする。数少ないものに多くが殺到すれば、人を押しのけて自分のものにする。さらに陰湿な場合、人に気付かれずに自分だけは得をする。このままではまれに見る人に気付かれずに善を行っている人などは損ばかりをし、世界中は滅茶苦茶である。しかし、現実にはある時は―まれではあるが―善者が認められ、最高に賞賛され、悪行ばかりしていた人は最も侮辱される。ほとんどが利己主義のまかり通る世の中であってもたまには善者が認められるのである。こういったことからみると、人間の本質は利己主義ばかりではなさそうである。では真の人間の本質とは何であろうか。

人間の本質を考える前にもう一度世界の様相を振り返ってみよう。今世界はたいへん不安定で世界的に史上最大の不況であり、日本を除いた世界各国では失業者は、十パーセントを越えある国では二十

今を積分したものが時間であり、時間を微分したものが今である。

パーセントにも達しようとしている。しかし、そう言って不安は感じているものの人々は楽観的で、何とかなると心のどこかで信じている。今までもどうにか悪い状況を越えてきたからであろうが、それを乗り越える時必ずどこかで戦争があったことを忘れてはならない。戦争によって人々は死に、技術は飛躍的に向上する。その結果戦争前満たされなかった欲求は一時的に満たされる。ただ一時的な欲求のために多くの人々は死ぬ。ただこれだけなら利己主義のために人々が死んだと言える。しかし、たいていの戦争の原因は、各国の存在に対する欲求が含まれている。それの対象が食料であれ、思想であれ、それなくしてその国は存続し得ない時戦争は起こる。だからと言って戦争を肯定しているのではない。戦争は決して肯定しないが人間の欲求に対する利己主義が、ある場合においてはむしろ正しいことではないかということだ。しかし正しい利己主義があるはずはない。利己主義はあくまで自分勝手なものである。利己主義のみが人の考えを制するようになれば世界はどうにもならなくなるだろう。では今まで人間を救ってきた正しい利己主義とは何であろうか。そこで考えるべきことは欲求についてである。欲求が常に善行に反するというのはまちがいである。ただ善を欲求し実行することは悪を実行するよりはるかに難しいことであり、それを持続することなどは並みのわざではない。又何かを欲求する人が欲求が正しいと判断してもそれが真に正しいことはまれである。つまり欲求が悪であると判断されやすいのは、欲求があまりにも悪に陥りやすいためであり、その欲求に制される利己主義が悪とみなされるのもそのためである。だからこそ人間は正しい欲求を見出さねばならないのである。現在の人々はあまりにも自分のことだけを考え行動する結果、それによって安易に得られる利益におぼれ正しい欲求がますます見えなくなってしまっている。人が自分のことだけを考える時彼らは主観的になりすぎ自分達の目の届く範囲だけを正義と勘違いし、それらをどんどん正当化してゆく。では我々はこの堕落した社会をどうやって越えていけばよいのだろうか。

今世界は堕落しつつある。しかし堕落しきっているのではない。一部にはそれを主観でなく客観によって見つめ、どうにかしようとしている人々もいる。あまり目だたないため、活躍できる場がないだけである。又世の中には、正しい欲求をしたい人も数多く、悪を全く正当化しきっている人は数少ないであろう。つまり多くの人は主観的でなく客観的に自己を見つめ直すことで、自らの行為を正しいと思い込むことを止めるのがよいのではないか。主観に執着している人がうまくいくだろうかと思うかもしれないがそうしたことを続けていれば必ず正しい欲求は満たされるに違いない。では悪を正当化している人はどうか。悪を正当化するのは人間の利己主義の根本である。自分がどうにもならない状況に陥った時、人は誰でも利己主義的になり得るのである。これはどうにも防ぎようがない。人間としてどうにもならないことをどうにかしようとするのは当然でそれがなくなってもまた、人としての価値はない。問題はそれをどういった方向に向けるかである。つまりいかに生きるべきかという問題に帰着する。

今世界中の人々はこのようなことについてもっと論じ合うべき時が来ている。世界は乱れ、いまにも崩壊しそうで

時間を場所で積分すると歴史になる。

ある。いかに生きるべきか考えることは、今後の世界をどうしていくかを考えることである。人としてどうしようもないなどとあきらめてしまってはならない。しかし人間の本質も戦争の本質も変えることは不可能である。本質を変えることはそのものをなくすことにつながる。人間の存在する限り戦争は起こるであろう。しかしもしそれが起きても人間は存続せねばならない。そのためにも今現在のことを深く考えねばならない。それを真剣にとりくむことはきっとよりよく生きることにつながるだろう。世界を見つ直していくとそれは主観だけでは考えきれない。人の本質を考える時必ず客観的に自分を見つめるということが必要となるだろう。これは欲求を満たす行為であっても単なる利己主義ではない。本来利己主義が主観的なものであるとすればこれは客観的利己主義と言える。それぞれの立場を一歩さがって見つめることで全ての欲求を満たそうとすることである。かと言って主観的利己主義を否定しているのではない。何らかの行動を起こす時主観にもどらず何ができようか。自らの正当性を主張する時主観にもどらず何もできない。その時は聞き手が客観的にならねばならない。つまり主観性と客観性の使い分けが最も必要なのである。又その両方の性質の利己主義を持っているのが人間ではないのか。

人間が主観的利己主義のみを主張する時、欲求は善悪の判断によらず一人歩きし、あげくには、その両方の主張が表面化し、人は分別なく活動を始める。人間が客観的利己主義のみを主張する時、欲求は満たされることを忘れ、活動は止まる。ただ人の分別のみが残る。その両者をうまく使い分ける時、その人間は最大に生き始める。

両者を使い分ける判断力、それは人間の理性であろう。理性ある人間はその両者を使い分ける可能性を持っているに違いない。今世界はそういう人間を必要としているのではないか。

歴史上の大人物はそれぞれの時代の試練においてその生命をかけた。今現在この世界でもそういう人物は現れようとしていると信じたい。ある戦争小説の主人公ヤンは戦争の本質についてこう言っている。戦争は腹が減るものだ。パン一きれあってもけんかになる。けんかは終わるまで続く。終わった後は空腹感だけが残る。パン一きれなどなんの価値もない。つまり戦争とは初めから意味はなく終わってみればなおさら意味がなくなる。これは人間の本質も多くを感じさせる。しかし、欲望の塊ー人間は、欲望自身によって自らを傷つけるけれども、又それ自身によって救われるだろう。理性をもってすれば必ず欲望は制されるだろう。つまりは今後の世界に理性ある社会が誕生するか否かに今後の世界はかかっている。今世界はそういう状況にあるのではないか。我々はその使命を担っている。

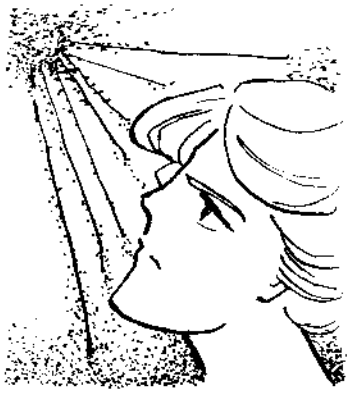
☆自由作品――

キタキツネより伝言
ー『教師って?!』ー

三年十一組　喜田　貴美枝

最近、教師志望の人が増えている。この学校の中でも、教育系の大学へ進学する人は多い。どうして、こんなにも多いのだろうか。教師志望の人の口から「教職は安定してるし、文学部の就職ってあ

んまりないからね…。」とよく聞く。また、教育系大学志望の人に「教員免許をもらって、まあ運よく採用されたら、教師になってもいいな。」ということも聞く。そして、生徒集会や行事をさぼり、HRで外に出て皆と遊ぶより、暖かい教室でいつもの友だちと話している方がいいという人で、時に教師志望の人がいるが、この人たちは教師になって何を教えるのだろうか。HRのさぼり方か、それとも外で遊ぶよりこたつにくるまってる方がいいとでも、教えるのだろうか。今までそういう反感を持っていた。そういう人に教師になって欲しくないとも思った。今も思っている。しかし、僕の考え方も少し変わってきた。〝どんな人が教師になっても、大切なことさえ忘れなければ、いいじゃないか〟〝このような教師像にばかり固執しない方がいいのではないか〟と、思えてきた。生徒たちは十人十色だから、運動の方が好きな子だって、勉強の方が好きな子だっている。だから、教師像は固執してはいけない。そして、今から勉強以外に何を教えるかなんてわからない。直接、生徒と接しなければわからないことである。今の自分がHRをさぼろうと、大切なことさえ忘れなければ、教師になれるのである。僕はそう思い始めた。



　では、大切なこととは何か。人それぞれの教師像の中に、大切なことを見い出すと思う。TV番組の「金八先生」「熱中先生」の中の教師は人気がある様だが、僕は別に感心しない。確かに、一教師像かもしれないが、あまりにも教師がめだちすぎている。主人公は教師であってはいけないのだ。生徒が主人公なのだ。だから、台本の上での学校生活を、現実に写し出すのは危険だ。また、その他の学園ドラマはどうして毎回出てくる生徒たちが、限られているのか。そこが（TVだな。）と思う所である。現実ではやはり、主人公は教師でも、五―六人の落ちこぼれの生徒でもない。生徒全員が主人公なのである。教師は、ただの照明係なのかもしれない。

　ここで二人の先生の印象的な言葉をあげてみよう。T先生の言葉に「教師は決して、妥協してはいけない。〝これでもか、これでもか。これがだめなら、これはどうだ〟と、生徒をどんどんひっぱってあげなくてはいけない。」とある。T先生は学問を教える教師として、この言葉をおっしゃった、と思う。しかし、この言葉からT先生がどれだけ生徒を教えることに、情熱を持っていたかがわかる。もう一人、I先生はこう言った。「教師は生徒に、希望を持たさなくちゃいけないんですよ。希望を持たせない教師は失格ですよ。」と。教師と言っても、ただの人間である。神でも仏でもない。人間のすることだから限りがある。しかし、全力で生徒のことを考えることが、根本であると思う。別に、生徒につきっきりになれと言っているのではない。ただ生徒に対して、暖かい目で見てあげるおもいやりを、いつまでも持っていなくてはいけないと思う。簡単なことの様だが、教師の根本ではないだろうか。僕一人にしても、無力な人間である。まして、僕なんて決して、広い人間ではない。そんな僕は、生徒たちに何もできないかもしれない。ただ、僕は生徒と話したい。一人でも多くと話したい。話せば、自然とするべきことがわかるだろう。それが情熱となってくると思う。教師だと言って、申

砂時計の砂が、すべて落ち切ってしまっても、時は流れ続けるのである。

し分のない人間ということはない。生徒たちと話しているうちに、学ぶべきことが見つかると思う。結局「良い先生」なんていないのではないか。だいたい「良い先生」の基準なんてどこにもない。それは教師も、生徒かもしれないからだ。

僕は今、教職に魅力は感じない。それは、苦しくつらい職と思っているからだろう。しかし、聖職だとは思う。教師は一人の人間の運命も変え得る場合もある。だからと言って、教師は一人の人間にしかすぎない。ただ、おもいやりによって精いっぱいのことをするしかないのではないか。それが、大切なことだと思う。

僕の自分なりの考えを述べてきたが、（頭の固い考えだ）と思う人がいてあたりまえである。しかし、今の教師志望の人に教職をもっと重く考えて欲しい。

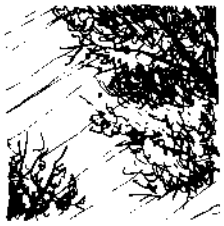
（僕はいつまでも夢を追い続ける。）

文学のもつ可能性について

三年十組　中瀬祐美

あれこれと、とりとめもないことを考える。最近は「文学」というものを自分なりに定義するのに夢中になっている。自分の頭の中をすっきりさせる為でもあるが、他の人にとってもいくつかおもしろい点があるかもしれないので、ここに書き出してみようと思う。

文学は（中でも特に文芸と呼ばれるもの）芸術になり得るだろうか。このことを考える為に、まず芸術とは何かということを考えてみよう。これはむずかしい。――あるいは時をとめる手段かもしれない。私たちは時をとめたがるから。時をとめたい、と思うのは、「永遠にかわらないもの」に対する人間がもつ願望である。ではなぜ永遠にかわらないものを私たちは求めるのだろう。人間自身があまりにはかないからか。（自分にないものをほしがるのは確かに人間の特性の一つには違いない。）それともひょっとしたら、感情、思考、もしくは形容しがたい何か、私たちの精神にふれてそれをふるわせた何か、をいつか自分が忘れてしまうことを人は無意識のうちに自覚しているのかもしれない。その〝いつか忘れてしまうかもしれない〟という不安が、はかないものを哀しみ変わらないものを求める願望をおこさせる。多分私たちは忘れてしまうのが恐いのだ。甘美な想いや信じがたい美や善が自分に与えた衝撃を、忘れてしまうのが惜しくてたまらないのだ。だから蝶々か何かを針で突きさしてガラスの箱に入れておくように、心に写った影や印象を、絵画だとか音楽だとかいう姿にかえてこの世に存在させようとするのかもしれない――。この考え方は最も人々を納得させる。事実多くの人は芸術をそんなふうに捉えている。だが果してそれだけだろうか。芸術とは単に春に咲いた花を氷づけにするようなものだろうか。時をとめ、印象を具体化し永遠に存在させる為だけのものだろうか。私はそうは思わない。いや、時をとめるというのは芸術のもつ一つの結果には違いないのだ。しかしそれが目的ではない。大切なのは誰か自分以外の人が、その具体化された心像に何かを感じてくれる、ということなのだ。わかりやすくいえば、芸術とは感動を伝える手



男女同権はうそなんか！（女だからやめろといわれた子）

段である。手段が嫌なら別のいい方をしよう。芸術とは感動を伝えようとする行為そのものだ。（ただ絶対に誤解してはならないのは最初に人を感動させようという意図があって芸術が選ばれるのではないということ。最初にあるのは自分の感動である。）

何故なのか。自分が美しいと思い、衝撃に打ちふるえ、あたたかい血を自身の体内に感ずればそれでいいではないか？それでも絵かきや音楽家達が表現せずにいられないとしたら、他人に感動を伝えずにいられないとしたら、それを彼らになさせるのは一体何なのだろう。私に思いつくことができるのは、あの使い古された「愛」とかいう陳腐な言葉しかない。（驚いたことに人を芸術に導くのは人間への愛なのだ。彼がどんなに人里離れた所にいようとも。）

話がそれた。もとに戻って芸術とは何か、ということを具体的に追ってみよう。あるときすこぶる上等のピラフを食べたとする。独りで味わうには勿体ないほどいい味だったとする。私たちはそういう時、自分の友人をその店に連れていけばいい。彼はそれを味わうことができる。しかし、これがピラフなんかじゃなくてもっとはかないもの、もう二度と繰り返しのきかないものだったとしたら、私たちはどうすればいいのだろう。この世で最もはかないのは人間の心である。私が自分の感じた気持ちそのものを、（その中には感情とさえいえないような刹那的なものもある）誰かに伝えたいと思った時にはどうすればいいか。一番可能性がありそうなのは、自分が感じたのと同じ状況を他人にもつくってみることである。小さい子

が陽ざしを浴びて、暖かいのがむやみとうれしい時、その子はあなたの手を引っぱって言うだろう。「ここへ来てごらん、あったかいよ……。」そういう理由で絵かきは絵を描く。彼が感じた何かを人々がほんのわずかでも感じてくれればいいのだがと思いながら、もう一度彼が見た風景を描いてみる。しかしそれはもはやありのままの風景ではない。彼が創り出した新しい空間である。彼の感性そのものだ。人々はその空間の中に入ってそこで初めて何かを感じることができる。音楽家は色や光影でなく音を使ってやはり空間を創り出す芸術とはつまり創造である。新しい空間を創り出すことである。

文芸作品と音楽や美術の作品とはどこが違うのだろうか。どちらも同じことを目的としているが大きな違いがある。音楽の音、美術の色彩、光影に対して詩や小説は「ことば」というもので構成されているという点だ。音や色彩、形、等のものは自然界に初めからあったが、ことばというものは人間がつくりだしたものである。この差は決定的である。

何年か前から私は言葉ほどあやふやなものはないと思うようになった。それからは絶えず言葉に対して疑いのまなこを向けてきたし、あるいはその不完全さにイライラしてその辺のゴミ箱かなんかをけとばしたくなることさえある。そうだ、不完全。これほどまでに「なっちゃいないシロモノ」を私は他に知らない。まるで自分の心を伝えられないのだ。当然といえば当然である。多分言葉というものは人間が互いの思考や意志を伝達するために必要にせまられてつくり出したのだろう。感情や感動を表現したり伝えたりする為に生まれたものではないのだ。その証拠に文学の中でも批評文、論文な

どと呼ばれるものを考えてみればよい。私たちはそういう類のものなら、時間と努力さえ惜まねばどんなものでも理解することができる。しかし詩や小説となるとそうはいかない。文芸作品は普通、思考や意志や知識の伝達の為にかかれるものではなく、むしろ感覚的なものを伝える為のものだから。ここで問題が生じる。言葉というものは感動を伝える為の材料として音や色彩と比べると、あまりにいいかげんすぎるのだ。

文学は芸術になり得るだろうか。もし芸術が作者の感動をそのまま伝えることを目的とするなら、文学が芸術であるとはおそらく言えまい。しかし芸術が、新しい空間を創造しその中で何かを感じることを目的とするなら、文学は間違いなく芸術である。一つの曲が一枚の絵が、すでに完成された空間なら、一冊の本はまた未完成の空間である。読者がそれを完成させるのだ。日本語と英語と仏語が違うように、人にはそれぞれ自分の言葉というものがある。一つの言葉に対して人が持つイメージは千差万別だ。ものを読む、ということは言葉を自分の内に自分のもつ意味で位置づけていくことである。そのようにして自分の内に新しい空間を創っていく。だから文学の場合は、他の芸術のように出来あがった空間の中に入っていきそこで作者と同様の体験をするというわけにはいかない。自分の内部に自分で空間を完成せねばならない。「文学は人を絶望につき落すが音楽は人を絶望から引き上げる」という文句を聞いたことがあるがそのとおりだ。それぞれが創造者である以上、全ての読者が新しい空間を完成できるかどうかは疑問である。途中で崩れることもあろうし、言葉を符号の羅列としか見なせないことさえある。例え完成しても、その空間が曲がりくねっていればその中でもがき苦しまねばならないだろう。しかし、人々は時に、思いがけないような空間を創造し、すばらしい感動を得ることができるかもしれない。そのような空間は、著者だけのものであり、又は読者だけのものでもあり、しかもそれ以上に二人の感性の合作である。

ひとくちに文学といっても、今では様々なものがいり乱れている。融合しつつあるのかもしれない。随筆なのか小説なのか区別のつかないものもあるし、評論も知識書も詩も、新しい形がどんどん生まれていく。眼が見えても耳が聞こえても文盲であれば本は読めない、という人もある。それは文学のもつどうしようもない欠点といってよい。しかし、逆にいえば音や色彩や光影が、眼や耳という肉体的器官によって受けとられるものである以上、そこには限界がある。眼が見えなくなれば、いつか見た絵の色もあせていく。空間が自分を包んでいるか、自分の内部に空間があるかの違いである。一度自分の中に新しい空間を創りあげた者なら、二度とその本を読むことがなくても、(例え本人がその存在を忘れていたとしても)その空間は決して消えることがない。言葉が人間のつくったものであり、感動を伝えるのに不完全であるがゆえに、文学のもつ可能性は無限である。

教育とは、理想を追うこと。政治も然り　なのだ。

しいはく…

近頃の若い者はとは言うまじ
（著者の頭は古い）

稲川正義先生

以下のことは、年寄り教師の戯言、しばらくの間、辛抱願いたい。

長らく高校で若い生徒諸君と接して来たが、時代の移り変りと共に、生徒の気質も、物の考え方も、価値観も、随分変化するものであると、最近痛切に感ずるようになった。私が教師として過ごして来た時代は、背景として、日本の戦後復興・産業の活動発展・ベトナム戦争・学園紛争・自動車生産台数世界一・昭和元禄と貿易摩擦の時代であった。過去には、学問に興味を持ち、野性味があり、勉強にも熱意があり、しかも将来何かをしてやろうという生徒がかなりいた。最近の多数の生徒は、勉学に対する根性がない。物理及び化学からの逃避（理系選択の減少。電子、機械、化学、生物工学等の技術革新はどうなるのか）。日本史、世界史の一方のみしかやらない。中には、太平洋戦争が第二次世界大戦と同じであることを知らない生徒がいる。新田義貞は、新撰組の一人であると思っている生徒もいる。学問は面白くないと言う（いわゆる成績の良い生徒でも）。校外教授（遠足）をすれば、歩く（汗を流す）コースは人気がない。父兄の言によれば、自分の部屋の掃除、自分の下着の洗濯は親まかせ。テレビの世界に没頭（活字を見ない）。又夢がない。自分の実力はこれこれだから、やっても将来は決まっている。なまぬるいなまぬるい。これは我国全体の風潮であろうか。新聞によれば、アジアオリンピックに於ける日本選手のねばりの欠如が指摘されている。物に恵まれ、野性味、フロンティアマインドを次第になくして行くのか。

このような状態で、我が国の将来はどんなになるか。日本の置かれた国際社会を見てみよう。アメリカとの貿易摩擦。中国の発展。東南アジア諸国の日本に対する警戒。ECの日本製品輸入制限。わき起る対日批判等々。国と国とのつき合いは、冷厳そのものである。我が国は国土狭く資源なし。国民は働いて貿易で金を稼がなければ食ってゆけぬ。一億一千万の国民は、どこへ行くのか。現代の生徒の中にも、学問に対して情熱もあるし、真面目に向上せんとする者もいる。多数の生徒諸氏よ、学問に、スポーツに情熱をもやし、人格を磨き（自分の幸福を追求するのも良いが）社会に貢献せよ。そして懸命に生きよ。

シルクロードの旅

近松淳一先生

㈠ **光と影**　シルクロードとは「絹の道」。又西方からは物や技術や精神文化がもたらされた。東西交易の道である。しかしもう一つ忘れてはならない事は悲劇の道でもある。それは河西回廊の都市の一つ、「酒泉」に着いた時思い出したのは求法僧法顕や玄奘が此処を通っている。彼等は此処を通りインドに行き、辛苦に辛苦を重ねてインドから経典を持ち帰り、経典を翻訳し中国仏教発展の緒口を切り開き、更に我国の仏教にも大きな貢献をなしている。玄奘の法相

宗が奈良時代南都六宗として発展し、ごく最近法相宗薬師寺管長高田好胤師一行が大雁塔に行き供養をしている。前漢の武帝は西方との交易を図り、匈奴を駆逐し交通を保たねばならなかった。そこで若い将軍霍去病等が派遣されている。この「酒泉」の名称は武帝から賜った酒を泉に注ぎ、部下の兵士と共に悦び合ったと云う故事より起ったと云われる。漢より唐、その後屢々戦は繰り返されている。唐代の詩人王翰の「葡萄の美酒、夜光の杯。飲まんとすれば、琵琶馬上に催す、酔うて沙場に臥す、君笑う莫かれ、古来征戦幾人か回る」と云う涼州の詩がある。人間とははかないものである。無事生還した人は幾人あるであろうか。表面は豪快に飲んでいるが明日という未来はわからない。心の底には無限の悲痛な涙がかくされているように思われる。この道には戦によるこのようなさびしさがにほってくる。因みに夜光杯工場を見学したが十四年のベテラン技術者が八時間労働で月給が五千七百四十円、四六時中水を使うので、指や手のしびれが多く困って居られた。トルファンの靴工場勤務の労働者の収入が月一万三千五百八十円と差の大きいのに驚く。一人一日に一個しか出来ない夜光杯技術者の待遇が気にかかる。又李白の「子夜呉歌」の「・・・何れの日か、胡虜を平らげ、良人は遠征を罷めん」戦地の夫を想う妻の心情の詩である。又嘉峪関に行くと此の地はかつてゴビ灘であり、四世紀法顕が「上に飛ぶ鳥なく地に走獣なし」と云っているように全く酷暑、冬には寒冷、一木一草なく地獄そのものである。明の太祖が吐蕃に備えて作られた西端の関である。関と云うよりも望楼は五階建てのビルの様な。城内の広さも二万五千平方mもある全くの城である。此の地に常時四百人の兵士が待機していた。暑さ寒さに耐え、父母を考え妻を想い我子の成長を願って望郷の念、やるせないものがあった事であろう。丁度我国の律命制下の防人の歌の「韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてぞ来ぬや母なしにして」と農民の悲痛なる声が伝わってくる想がする。清代阿片戦争の硬骨漢林則除も皇帝に排され、避地に流される時此の関を過ぐる詩として、「一騎纔かに過ぐれば即ち関を閉ず、中原、首を回らせば涙痕潸たり」と吟じている。人の運命は判らないものである。陽もあり、陰もある。この望楼より今砂漠を眺むれば蘭新鉄道の長い列車が走っており、城中を見下ろせば青葵の花がさびしげに咲いていたのが目に残る。

(二)樹下美人　夕食を安西で済ませ、敦煌に着いたのが夜の十時である。敦煌までのバスの中より夜空を眺むれば無数の星が吾々を包んでいる。何と空の広さと美しさをしみじみと味わせてくれたことか。神秘と憧憬の地敦煌。シルクロードにはいくつものルートがあるが、東から西に行けば、西域の入口に当るのが敦煌である。その敦煌から南へ25km、鳴沙山のかげに莫高窟千仏洞がある。この千仏洞は旅の商人、武将等が安全、成功を祈願してこの窟を寄進したと云われる。目指しのきつい昼、莫高窟と書かれた郭沫若の額を見てああやっと来たのかと云う安心感が湧いてくる。砂漠の粗い重い砂を踏む足どりもまことに軽い。作家の井上靖氏は敦煌で恋人をつくれと云われたが、私も大勢の恋人が出来た。その中でも158窟の涅槃像、45窟の法華変普門品、17窟の樹下人物図等である。十日間あっても足りないのに、あわただしい二泊三日の中で40窟を見学した。その中で17窟はもと蔵経洞と呼ばれ宋代までの貴重な経文や文書を蔵していたが、西夏の侵入に際し、封じ込められ、明治三十三年道士が発見し、世界の話題となった。この間の状態をロマンと識見の

高さと筆の運びのよさで表現されたのが井上靖の「敦煌」である。17窟はもともと洪鷺の御影堂でもあり、洪鷺は仏教発展と唐朝統一に力を尽した人物である。恰かも万巻の経典を守り、番をして居られる像を毎日新聞主催の高島屋展で見たが、丁度唐招提寺の鑑真像や、俊乗坊重源の像に似ている。その背後に右に比丘尼、左に侍女と対にしてあらわしている。樹木や人物の描法は盛唐の伝統を受け継ぐものである。暗闇の中で懐中電灯を照らし乍ら人物像を観るに樹下の侍女は頭は双髻で男装し、右手に杖を執り、左手に巾を掛ける。比丘尼は袈裟を着て、扇を執り、右の樹には水瓶が下って居り、左右の菩提樹の両端には瑞鳥が飛んでいる。侍女の顔は丸顔で、まだ童顔が残っていて美しく、可愛い。しかしあとで見た新疆ウイグル自治区博物館の樹下美人図の方が気品も有り、暢達の描法まで、正倉院の鳥毛立女屏風の樹下美人の容姿や高松塚壁画に影響を与えている様に推考される。何故樹下の下に女性が描かれるのか。女性は美の対象であり、又女性特有の機能である生産へとつながる。樹下美人の樹は日本では松、中国では桃や菩提樹。インドでは無憂樹か、菩提樹である。インドのヤクシニー女神は裸体で菩提樹の下に座り、摩耶夫人は無憂樹で釈迦を産む。砂漠や暑い処の民にとって水は最も必要。生命維持の為に。水のある処に樹木が生育し、オアシスをつくる。木は生命の表現となり、それは砂漠の民にとっては浄土の世界そのものであり、光明でもある。だからこそ美人像には樹下が必要と察知される。莫高窟見学少し草臥気味、ポプラの樹の下に休息、丁度その時刻水が流れて出る。微風は無くても本当に樹の下は安息の場所である事が痛感させられた。日本の美人画の樹木は天平以降はだんだんうしろへ遠のき時代を経るに従って消えて行く。

㈢その他まだまだ印象に残る処が多い。例えばトルファン、ウルムチの夜、幻の炳霊寺、ベズクリク千仏洞、交昌国故城等である。枚数の関係で省略する。シルクロードの旅に出るのに参考になった本を紹介しておきませう。中国史は別として、玄奘「大唐西域史」陳舜臣「敦煌の旅」　井上靖「敦煌」　松岡譲「敦煌物語」　共同通信社「シルクロードの旅」　文物出版社「敦煌彩塑」　毎日新聞社「中国敦煌壁画展」　岩村忍「シルクロード」　森豊「シルクロードと日本文化」　池島信平「歴史よもやま話東洋篇」　交通公社「ポケットガイド」　角川書店「中国名詩鑑賞」　週刊文春「中国野菜調査隊」　深田久弥・長沢和俊「シルクロード過去と現在」日本放送出版協会「新中国取材記」「シルクロード・巻一六巻」「敦煌への道」

思いつくままに

伊藤精幸先生

奈良という言葉には、どうも抹香臭い、あるいは、泥くさいといったニュアンスがあるらしい。京都のように洗練された美しさは、ないし、いわゆる観光地も京都ほど多くない。しかしながらなぜか私は奈良が好きである。それも市内や斑鳩のような観光地となっている所以外のほうが好きである。高校時代に柳生街道を初めて歩いた時、なんでもないその景色の中に、今まで忘れていた何かを、ふと思いだしたような気がした。それが奈良を歩くようになったきっかけであった。春日山を越える滝坂の道の石畳の上には、厚い落葉の絨毯が敷きつめられ、多くの磨崖仏群がそれを見おろしていた。また柳生の里に出ると、野を伝う小径の傍に、なにげなく石地蔵が

佇み、かすかに微笑を浮べていたのだ。その光景が妙に心に焼きつき、以来しばしば、カメラと案内書を携えて、石仏をたずね歩いたのであった。

奈良と言っても、市内を一歩抜け出ると、のどかな山村が広がり峠の向こうの高原には、青い茶畑が広がっている。小賢しい人間どもの素晴しい文明とは別の、もう一つの現実がそこには生きている。農作業をしている人が振り向くので、ぺこりと頭を下げると、向うも頭を下げる。大和高原には、平坦な土地は少なく、棚田や段々畑が広がり斜面の多くは茶畑である。そんな所を、歩きまわるうちに色々なことを発見する。村の小高い所には、たいてい社があり、石仏や石塔があって、そこが村人にとって重要な場所であったことに気が付く。また、人がめったに通らない山道の途中に実に立派な石仏が刻まれ、それが阿弥陀仏であったり、観音であったりし調べてみると、鎌倉時代あたりの古いものも結構多い。今は、人影もないが、当時は重要な交通路として多くの人が行き交ったのであろう。しかし中には、道もない山中に石仏があることもあり、不思議である。ある時には、一日で見つけることが出来ずに、何日も出かけて捜しまわり、アザミやイバラで足を傷だらけにしてやっと出会えたこともあった。それは冬の日であり、うっすらと雪をかぶった姿が今でも印象的である。

石仏の顔には、豊かな表情があり、石であるにもかかわらず温かみを感じることさえある。そこでは、石に対して人間が抱く感情が非常によくわかる。石造物は、世界に数多く、ドルメンやメンヒルのようなものから、エジプトやインドの洗練されたものまで様々である。昔は、石が生活と非常に密接な関係をもち、様々な感情と結びついていたはずだ。しかし人間が石に対して抱くこの素朴な感覚は、都会では失われがちである。それは、温かさであったり、冷たさであったり、安らぎであったり、恐ろしさであったりするのだろうが、ただそれは、単なる無機物に対するものとしてではなく、自らと同等に存在するものとしてとらえられていたに相違ない。命をもっていると表現してよいのかも知れない。この命を感じる対象の範囲が、現代人とでは、かなり異なっている。たとえば、いつも歩いている道を考えみると、土の道は雨が降ると泥でぬかるみ、乾くと砂ぼこりが舞う。そして夏には、草が茂り花が咲き、秋には枯れ葉の衣を着る。しかし舗装された道路は、雨が降ってもぬかるまず乾いても砂ぼこりも上がらない。しかしコンクリートに覆れた下の土は、空気も通わず窒息し死んでいる。それは道ではなく道の死骸が横たわっているのだ。それが息づいていると感じることはない。しかし、逆に生活にとって何と便利なことだろう。何も失わずに便利さだけを得ることは出来ない。自然を尊び観賞したいと思う人は多い。しかしほとんどは、自然の美しさや新鮮さだけを享受しようと欲している。スカイラインをドライブし、高原に行き鉄筋コンクリートのロッジに泊まり、山を眺め、高山植物に感動する。それは、スクリーンに写されたものを見るように、自然の枠の外から、それも眺めている。しかし自然は、恐しい力で、人の命を奪うことも多い。文明が自然の力の外に人間を置くことに努力して来たとしたらそれは、成功してきたと言える。しかし、自然の苛酷さを経験せずに、そのほんとうの美しさを知ろうとすることは、出来ないのではないか。ちょうど、絶望を味わったことのない者に、希望の意味がわからないのと同じように。

文芸

循環

三年三組　運命の奴隷

その日―世界は静かだった。少なくとも静かに見えていた。いつものように空は青かったし、森の中では小鳥がさえずっていた。人人はその文化的人生をそれまでと同じように過ごしていた。その次の瞬間にもやはり今までと同じだろうと思いながら。

だが、それはまさに突然に起こったのである。もっとも、それに気づいたものはいなかった。というより気づくことができるものがいなかった。

人間はただ、突然の変化にうろたえ、対処する術を知らず、ただ身を寄せあって震えていた。その傍でテレビが楽しそうに笑っていた。　ああ、何と悲惨なこと!!　人類は何千年何万年もの間、ひたすらに築き上げてきた自らの文化をすべて、いや正確に言うとその使い方を、突然にして失ってしまったのである。

何事もなかったように、やはり地球は太陽のまわりをまわっていた。青い地球。青い海に囲まれた緑の大地。その上に確かに文化は残っていた。だが、その文化を使い得るものは、もはやだれ一人としていなかった。高層ビル、道路、通信網。使い手のない文化などもはや瓦礫にすぎなかった。……

自ら創造した文化を失い、生産する手段を失った人類は、一人、また一人とばたばた死んでいった。都市は、かつての文化の誕生の地は、死体置場と化した。――いったいだれがこんなことを?!――それは最新の軍事兵器かもしれない、特殊な宇宙船かもしれない。しかしいずれにせよ、それを発動せしめたのは、神だったとしか言いようがないだろう。

だが、こうした中でも人類は全滅したわけではなかった。所詮、人類も種を残そうとする生物以外の何物でもなかったから。生き残った人々から見れば、空はやはり青かったし、森の中では小鳥がさえずっていた。何も失われたものはなかった。ただ、エゴイズムだけが文化の瓦礫の下に埋もれていた。いつかまた芽を出し、ジャングルを形成する日を待ちながら。

今、滅びゆく彼らのために

三年四組　あんちえび

あらゆる生物には寿命がある。個体としての寿命ではなく種としての寿命がある。種としての寿命は運命的なもので、もしかしたら何者にも違えることのできない掟なのかも知れない。こうしているうちにも宇宙のどこかで種の寿命を迎えている生物があるに違いない。

種としての最期を生きるそれぞれの個体は自らの寿命についてどのくらい知ることができるものなのだろうか。そして今、彼らはど

んな思いで生きているのだろうか。

「トキ」という鳥がいる。日本の様々な場所を翔んだ経験のある彼らだが、今はもう大空を翔べない。もともとトキは本州とその他のごく限られた地域に生息する鳥だった。今は……　佐渡が島に四羽だけ残っている。この広い地球でたった四羽だけが。

彼らが絶滅する前に一度図鑑を見て欲しい。（今となっては実物を見ることはほとんど不可能である）「ニッポニア・ニッポン」という学名を持つ彼らは、いかにも日本の鳥である。フラミンゴのようなスマートさも、白鳥のような優雅さもない。しかし、彼らには日本人を魅了させる何かがある。それは単に「ニッポニア・ニッポン」という学名だけかも知れない。だが、これほどまでに「日本」である鳥が滅びつつある事実を、特別な感傷なしには受けとれない。

四羽のトキは大空を翔べない――。

彼らが大空を自由に飛翔する時代は終わった。それは『ニッポニア・ニッポン』という名のもとに寄せられた感傷なのかも知れない。彼らは囲いの中に保護されてしまった。その囲いの中の彼らは今、何を考えて生きているのだろう。彼らは種の最期を生きる個体として、どのような生き方を望んでいるのだろう。それとも彼らは、まだまだ存続する種の一個体と思っているのだろうか。

囲いの中の彼らは、自らの生命の続く限り、その生を保障されている。が、彼らにとって囲いの中で安全に生きることが本当のしあわせなのだろうか。彼らは再び大空を翔びたいとは思わないだろうか。いかなる外敵にさらされてでも。

しかし、彼らが再び大空を翔ぶことは許されない　。

夢をみた。トキが奇跡的に種を保ち、佐渡の海を渡ろうとしていた。もはやあり得ないことなのに。彼らは大空を翔んでいた。

しかし彼らは大空に戻れない。

滅びゆく生物はトキだけではない。しかし、私がいなくなる前にトキが滅びてしまう事は否定できない。「ニッポニア・ニッポン」という名の鳥が絶滅する。「トキ」という生物が時の流れに負けて絶滅しようとしている。何という皮肉な話だろう。

滅びゆくトキにしてやれることは何もない。だからこそ、彼らをもう一度翔ばしてやりたい。滅んでしまう前に。

ほどなく新聞のどこかにトキの最期を告げる日が来るだろう。その時、もう一度思い起こして欲しい。最後まで翔べなかったトキのことを。最後までトキを翔ばしてやれなかった人間のこころを。

Special Delivery――特別航空便――

三年四組　若原久美

ポストまで、あと1ブロック……

冬の夕暮れが、辺りにうっすらと影を落とし始める頃、僕は何と

なくやりきれないような気分を、ひとときでも忘れるために、とりあえず街に出掛けてみた。コートのポケットには、一つかみのキャンディがつっこんである。子供じみているようだが、タバコを止められているので仕方がない。いつものように、角のポストを曲がったところで、僕は今日が聖夜(イブ)だということを思い出した。それというのも、今年の冬は、この国にしては珍しく暖かで、雪も降らず、とてもクリスマスなんていう雰囲気じゃなかったからだ。ここへ来てからもう随分になるが、こんなことは初めてだった。街に流れるジングルベルも、雪が降っていてこそのものだ、と思ってしまう。雪がなければ、何となくもの足りない、そぐわないものなのだ。それでも、暗くなりかけた路上にまでこぼれてきているツリーの光はいつもは足早に通りすぎていく人たちを、今夜だけでもなごやかな気持ちにする作用があるらしい。僕もその例外ではなく、いつしかぼんやりと、普段とはちょっと違った街の光景を眺めながら歩いていて、すれ違いざまに向うから歩いて来た人にぶつかってしまった。

「すみません。」

見ると、まだ小さな女の子で、急いでいたのだろう、肩までかかったプラチナブロンドの髪が乱れている。僕は、彼女が落とした白い封筒を拾ってやった。ちらりと見えた宛名には、「ママへ」とだけ書いてある。どうやら、クリスマス・カードのようだ。

「ごめんね。はい、これ落し物。」

「どうも、ありがとう。」

僕はそのまま先へ行きかけたが、僕を呼びとめたらしい声に気がついた。振り向いてみると、いましがたの少女だった。彼女は真剣に、

「あの……この辺りに、ポスト、なかったでしょうか。」

と、さっきは気づかなかったが、どこの国の言葉ともつかない、不思議なアクセントで問いかけてきた。手紙は、しっかり持っている。

「ああ、それならこの道を真っ直ぐ行って……」

説明してやりながら、ふと思い出したのは、カードの宛名だった。

「ところで、君はそれを、そのまま投函するつもりなのかい。」

道を聞いてしまって、立ち去りかけていた少女は、なぜそんなことを尋ねられるのか判らないといった様子で、じっと黙って、きれいなエメラルドグリーンの瞳で、僕を見上げていた。生来無口な性質(たち)の僕は、相手が小さな女の子だというのに、ちょっとどぎまぎしてしまった。

「いや、さっき拾った時にね、偶然見えてしまったんだ。その、宛名がね…。きちんと住所(アドレス)も書かないと、郵便屋さんが、その手紙を届ける時、困ってしまうと思うんだ……。」

彼女の眼が、一瞬、この見知らぬ男に対する態度を決めかねるように、あやふやな色を浮かべた。が、それはすぐに消えて、ちょっとためらいがちに、一つ息をしてから、小さな声で、

「ママはね、ママにはね、住所がないの。だって、ママは、私がずっと小さい時に、風になってしまったから……。」

「そうだったの……。」

僕は、この子の事情がわかりかけてきた。おそらく、この子の母親は死んでしまったのだ。悪いことを聞いてしまったかなと思いながら、僕は、あらためてこの少女を見た。街灯の光が、小さな頭を銀色に染めていて、彼女のいるあたりだけ、銀色の小宇宙にでも包ま

れているみたいだった。これで雪が降っていたら最高なんだがな、などとまた考えていて、この少女に、いつのまにか強く魅かれている自分に驚いた。そんな自分が照れくさく、それを隠すためにポケットから、さっきのキャンディを、いくつか取り出して、手のひらに並べるようなふりをしながら、少女に話しかけた。

「ねえ、アリス……」

「え？」

「いや、君がまるで、鏡の国から抜け出してきたアリスみたいだったから、ちょっとそう呼んでみただけなんだ。いけなかったかな。」

少女は、初めて少しだけくすっと笑った。

「あたしの名前はエイダ。ママがつけてくれたの。自分では、とても気に入っているのよ。でも、アリスも素敵な名前だと思うわ。」

「じゃあ、エイダ。もう遅いから、きっと君のパパは心配しているよ。ほら、このキャンディを持って、早くお家へお帰り。君は何が好きかな。ストロベリー、チョコレート、それとも……。」

「私が好きなのは、風の音……。」

エイダは、僕の言葉を途中でさえぎるように、小さく呟いた。

「私が好きなのは、風の音。ほら、今、ヒューと鳴ったのは、東の谷を渡って、頂上の樅の木をかすめて、西の谷へ吹きおろしていく風の音よ……。」

最後の方は、自分に言い聞かせているようだった。彼女だって、風は風であって、自分の母ではないことを、よくわかっていたのだ。

エイダは少し寂しそうだった。彼女の素直な心に触れて、僕は自分の今までやってきたことのわざとらしさに、恥ずかしくなった。しばらく向かい合ったまま黙っていたが、横を通りすぎていくいろいろな物売りを見ていて、僕はふと素敵なことを思いついた。ちょうど通りかかった風船売りに近づくと、真っ赤な風船を一つ買い求めた。そして、エイダから手紙を貸りると、それを風船のひもの端にしっかりとくくりつけた。そうして、不思議そうな様子のエイダに

「君は、ママは風になったって言ったね。」

「え…え。でも、それがどうかしたの。」

「風船なら、君のママがどこにいても、たとえ風だったとしても、きっと君の手紙を届けることが出来るに違いないとは思わないかい。」

エイダは、少し赤くなって、それでも眼を輝かせてうなずいた。

「ええ、思うわ。きっと、きっと届けてくれるわ。」

そして、僕から風船を受け取り、向こうを向いて、何かを祈りながら手をはなした。そして、目で風船の行方を追っているようだった。

エイダ、君の想いは、空へ還ったなら、どんな形になるんだろう、と彼女の背中へ心の中で語りかけていると、空を見上げていた彼女が、突然、独り言のように呟いた。

「あ、雪。」

僕も、あわてて空を見上げると、空から、この冬初めての雪がひとひら落ちてくるところだった。雪は、あとからあとから降ってくる。

エイダは、もうすっかり明るい顔で振り向いた。

「私、まだあなたに、メリークリスマスって言っていなかったわね。」

Santa Claus is comin' to town.

大　地

二年六組　ピクリン酸

空が―
青いね。澄んでる

私は帰ってきた。
ワタシ　ハ　カエッテキタ。

彼女の髪を風がなびかせる。地平線はゆるやかな曲線を描いて視野の外へ消えてゆく。まばらに草のはえた岩の大地が、目の前にある。

まったく無菌の星があった。誰も知らない土があった。人々は、競ってそこへ行った。そこで彼らは、永遠を手に入れた。そこでは地が彼らを容れなかった。死んでも腐敗がおこらず、水分も抜けることはない。紫外線が荒れ狂う空の下、草一つない大地には彼らは立つことはなかった。大地の中に選ばれた（誰にだろう？）人々が、いた。自分の成長を、老化を、止めたいと願い、それがかなえられた人々が静止していた。

それだけだった。新しい生命はずっとなかった。彼女が、生まれるまでは！。彼女が何故生まれたか、どうやって生きのびたか、知るものはない。ただ一つ言えるのは、彼女を、大地に帰りたいという気持ちが動かしていた　ということだけ―

そして彼女は帰ってきた。

今や彼女は、大地と同化している。全身で彼女は、大地を感じている。彼女は大地に横たわっている。彼女は大地（アース）になり、大地は、彼女になる。

これが本当の永遠、私にとってのニルヴァーナ

大地が、急速なスピードで、彼女を呑みこんでいった。

銀　杏

三年三組　上田達也

体はまだ熱っぽかった。が頭だけはやたらとさえていて、様々の事を考えていた。

風邪をひいて家に引き籠ってからもう2週間程になる。熱が出ては退き、の繰り返しだった。その間に外界はもうすっかり秋になっていた。はじめの2・3日は同情を寄せてくれていた友人たちもいつのまにか音沙汰が無くなり、我が家はまた静かになった。ふと子供の頃を思い出した。あの頃は耐え難かったこの静けさもかえって好む年になっているのかと思うと、なんとなく可笑しかった。

人間などは気の持ち方でどうにでもなるもので、体の熱っぽさにも係わらずに調子の良い様な気になる。久し振りに床を上げて書物でも読もうかなどと考えていた。窓を開けると抜ける様な「青」が飛び込んで来た。それと同時に私の心を「青」が占領した。はじめは気分の良かった私も、この事に気付くと急に不気嫌になった。座卓について書物を開いたが眼が活字を追うばかりだった。

一枚の銀杏の枯葉が舞い込んで来た。「重い」と感じた。耐え難い重圧だった。きっとこの枯葉も秋の重さに耐えかねたんだろう。そしてまた一枚、誰かに拾ってもらいたいように舞い込んで来た。

どこをどう歩いたのか、私は衣笠の停車場に立っていた。時刻はもう昼をまわっていた。

停車場横の小路を東へ入り、水たまりを避けながらだらだらとした坂道をのぼり切って、小川の橋を右へ渡ると寺に出た。普段は仏様とは疎縁なのだが、病身のためか、寺参りがしたくなった。大門をくぐって砂利を踏むと、突然目の前が明るくなった。

その女は丁度大門を出ようとしていた所だった。長い黒髪が砂利道に映えて、透けるような白い肌が薄暗い境内を照らしていた。思わず目で追っていた私の事などまるで気付かない様に、流れる様に大門をくぐって消えてしまった。

ふと目を足元に落とすと、純白のハンカチが落ちていた。拾い上げると微かに甘い香りがする。急いで追いかけようとしたが、大門を出てどちらへ曲がったのかすらわからない。本当に消えるように去ってしまったのだ。

しばらく茫然と立っていた。もう一度手を見ると、握っていたのはハンカチではなく一枚の銀杏の枯葉だった。

ふいに、銀杏の落葉が秋風に舞い上げられた。

分裂症

三年十組　ヘヒホハフンフン

失ってしまったものの多さといったら！

ちゃんと呼吸をしているか？
ちゃんとものが見えているか？
ちゃんと考えているか？

なんて毎日なんだ！
この安易さ！　（ふん、その方が気楽なんだ。）

なんの感情も　なんの感動も
おまえを揺さぶらないのは何故なんだ！

言葉は全て口からの出まかせ

昔はもっとものを考えてたと　嫌味なノスタルジイ

振り返ってどうだと言うんだ？

（――振り返らずして　前に進めるものか！）

失ってしまったものがいくら多くとも

それを埋め得るだけの新しい何かがあれば

それさえ　見つけられないのはおまえだ！

僕の今

二年十一組　藤上英裕

僕を取り巻く百億の灰。彼らは僕に百億の無理難題を押し付ける。僕の限界以上のものを彼らは笑いながら押し付ける。

僕は、僕を殺そうとする奴らを食ってやろうと挑みかかるが、その途端、僕は自身を思い出しへなへなと床に崩れ落ちる。横でせせら笑う奴がいる。奴の口の中は神が僕に与えた苦痛で満たされている。

僕の知能は0に近く、0からは何も生まれないことを僕は知っている。知っていながらも僕は何かを生み出そうと努力した。然し、その結果僕が目にしたものといえば、限りない虚脱を伴う絶望と、僕を取り巻く多くの人間に対する不信のみだった。

僕が最大に愛しているはずの人たちでさえ、僕を絶望の淵に叩き付ける。僕は彼らを愛しているが、僕は愛を知ってはいない。

神の使いが僕に告げる―万物を愛せよ。―と。僕は祈ることを望んだ。僕を救って下さるであろう唯一絶対の神に。然し僕を支配する虚栄と反抗は、僕を離しはしなかった。僕はゲヘナに叩き込まれる。僕はこんなに愛しているのに、汚れた血で満たされた恐ろしいゲヘナに叩き込まれる。

僕は愛する全てのものを。空も大地も人間をも。神は僕に、愛するための愛を与えた。大地は僕に優しさを教え、空は僕に希望を与える。そして人間は僕に憎むことを教え、疑うことを教え、悲しむことを教える。

僕は何よりも悲しい。愛することを知らないからだ。僕は自己満足の深さを知っている。そして灰をも愛さねばならぬことさえ知っている。僕はあまりにも人間だから、何時までも悲しい。一時の快楽によって、その悲しみが姿を消したとしても、僕がそれを背負っ

ていることは永遠に変わりはない。

僕は人を信じることが出来そうにない。然し僕は神を信じる。僕は僕の持論に矛盾があることを、ずっと以前から気付いている。然し僕にはどうしても人間を信じることは出来そうにない。僕の悲しみの一つはそこから出発したと言っても良い。

僕が重苦しい灰に取り囲まれるより前、大人達は僕に多くの事を教えた。その頃の僕は疑わなかったし、嘆きの存在さえ知らなかった。然し絶望という名の檻に閉じ込められ、百億に及ぶ灰に取り囲まれている今、僕にとって信じろという言葉ほど苦痛な存在はない。

僕の内部が腐敗しつつあることを、僕は数年前から知っている。僕は自分の醜さを正視出来ないでいる。そして、その醜さを他人に押し付けようとしている自分が見える。

僕は今思う。何故僕は生きているのだろう？

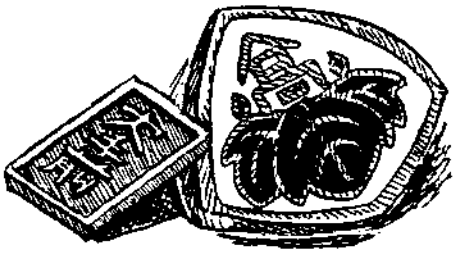
白い題

一年六組　ザ・E＝mc²

私達は〝いま〟という存在に気付いていない。と言うよりもむしろ、〝いま〟を蔑視している、と言った方がよいだろう。そしておかしなことに〝過去〟と〝未来〟に酔っている風潮がある。

かって大手前は、北野・天王寺と共に御三家と呼ばれ、多数の先輩たちを東大・京大などへ現役大量合格させたものだ。で、その規律も大変整っていたらしい。世間でも「大手前」と言えば一目おかれている。また、大手前へ入学すれば、即、有名国立大への直線コース　と思われているふしがある。　そして幾ら、自分の校内成績が悪かろうと、「ビリでも大手前だから」の感が拭えないまでもない。私達は自分の将来に対して偉大な（それは、例えばエリートコース）夢を持っている。世間がそう言うように。

でも〝いま〟即ち現実はそうじゃない。規律もかってとは比べものにならないほど自由化しているそうだ。自治会への関心の低下、読書量の激減……。このような類が大手前のみの実体とは決して言えないのだが、さきほど述べたその栄光とのギャップに、ひどく苦しむ。大手前を誇りとし、愛校心を持つことは決して誤りではない。でも、胸を張って、「私は大手前生や。」と言えないのは、何故か。却って何かがあるとすぐ「大手前だというのに――。」若しくは「やっぱり大手前や。」と言われてしまう。



この「大手前」という言葉には、過去からの華々しい伝統、未来への繁栄の意が、皮肉とも尊敬とも、期待とも嘲笑とも言えぬものとなって込められている。だから、「やっぱり大手……」とかを言われる度に激しい抵抗が渦巻くとともに、その実体を力説したくなる。「本当はね、大手前なんか……。」でも現実を語ったとしても、相手は真に受けてくれないし、たとえ聞き入れてくれたとしても、即、我が校の〝名誉〟に傷がつき、伝統が崩れ去るのがおちだろう。先輩たちの築き上げてくれた誇りは、それだけのものに相違ない。

さて、私達の、本質的な体質はここにあるのではないか。先輩たちの、その伝統の上に胡座をかき、横になっている姿がある。即ち、

〝甘え〟である。私達、そう〝いま〟はこういう状態なのだ。確かに私達には可能性は秘められているのかも知れない。それを単に表面に出していないだけなのかも知れない。もちろん、私達は世間の為に生き、その無言の圧力に屈従して学習を積み重ねているわけではない。だが、〝対象〟があるがゆえに私達はつい、それに甘えてしまうのではなかろうか。きっと、いや必ず、自分達もこうなるのだろうと　有名大学へ進学できると。〝対象〟は崇高なものだと思っている。崇高な対象（目標、と言い換えた方が分かり易いだろう。）を持てて、幸せだと思う。しかしながら、それに対する私達の甘えは捨てなければならない。そういう行為は即ち、〝いま〟を見つめることにつながるのである。いまを最大限に尊重するべきで、その尊重された〝いま〟は、この大手前の未来に於いて、貴重な、偉大なる資料、そして『大手前』の軌跡となるに違いない。で、現在までの伝統と融合していくと確信したい。ここまで書きつらねてきたが、かく言う自分もその伝統に甘えている一人なのだ！

しかし、もはや大手前は、いまを失ったのだ。

シュワルツシルトの特殊解

三年二組　K・N

時間とは何か。[*1]客観的には一律に流れるパラメータである。そこには何の感情もなければ意志もない。[*2]諸行無常である。あなたはここで相対論をとり上げて、時間は一律でないと反駁[*3]されるだろうが、何故あなたはそれがここで意味があると主張できるのか。一歩譲って[*4]巨視的体系におけるエントロピーの向きを右回りに正ととると主張するのなら、あなたはたった一つの陽子の崩壊[*5]をどう説明するつもりなのか。

[*6]主観的には時間は意識に逆比例する。またあなたは生物学的には確実な老化の尺度であるという。ならば分裂したゾウリムシのどちらが老いているのか調べることができるか。学問熱心な方なら炭素のアイソトープを測れと答えられるが、元素の酸化数を測った方が良いという提案[*7]がある。

自分が死んでも時だけは流れる。しかし、それをどうやって確認するのか。コペンハーゲン派の確率[*8]解釈に準ずれば無意味な命題である。主観的には時間は有限である。それでも時は人と人とを永遠に分かち、それぞれを忘却[*9]の彼方へと遠[*10]ざける。その方がいい場合も多いだろうが、記憶力が強くて、時さえも彼を慰められない人には別のすてきな解答がある。[*11]

時は有限である。それゆえ時[*12]は貴重である。卑近なその無自覚な例では、うちの妹もよくするのだが長電話がある。意図を持って電話することは不可能なのだろうか。[*13]また哲学などと称して言葉をもてあそぶ[*14]ことに本当に意義はあるのだろうか。またスプリングの原稿だといってデタラメを書きつらねてなにが面白いのだろうか。

（全ての答えは、何とも微小で不潔な生物だけが知っているとはなんという不条理なのか。[*15]）

すべての時間において個人は社会に属し、その拘束を受けている。[*16]周りのことを考えずに調子良くやっていると、さらにその拘束は強くなる。[*17]（それゆえ一部では社会に加わることに反対する意見がある。[*18]）貴重な時間を一秒たりとも無駄にすまいと生きることはあまりに重荷である。生物としての人間には、辺りを見回すだけに足る

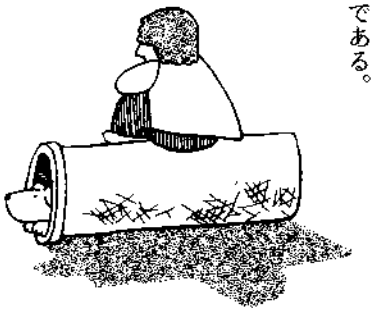
無意味のような時間が必要なのである。それがなければ取り返しのつかない結果を悔いることになる。[*19]

われわれはすくなくとも同じ時を共有する同じ世代である。われわれとはわれ、われとはわれわれである。[*20]時間はここにしかない。そしてそれは有限である。死が限りを決める。

有限な領域の中で無限に拡大された時間　空間を越え、世代を超越した時間　を実現する特殊解はわれわれの心の中にある。そして本当に貴重なものはそこで音を立ててほとばしり流れる何ものかなのである。さようなら。[*21]

注釈

＊1　次の1／5のうちからマークせよ。ということ。
＊2　ユーゴー。
＊3　牛肉などのひき肉をだ円形にまとめて焼いた肉料理。
＊4　ローレル指数一六〇以上。肥満体。
＊5　なるほどそういうことだったのですかという意味。
＊6　酒を飲むと暴れること。酒乱的。
＊7　酸化することに意義がある――クーベルタン男爵。
＊8　一次の成績をエンピツの責任だとする解釈。
＊9　注のこと。
＊10　エンざけ。すなわち猿酒のこと。
＊11　フロイトを読め。
＊12　ニッポニア・ニッポン。
＊13　不可能である。声が聞こえない。意図電話。
＊14　この注14は誤りである。
＊15　髪ノミぞ知る。
＊16　一翻しばり。
＊17　二翻しばり。
＊18　参加することに異議がある。
＊19　フリテンリーチのロンアガリ。
＊20　ヘーゲルを読め。
＊21　それにしても私はこの言葉はあまり好きではない。というのは何かとても悲しいからである。



Can you assert that they are wrong ?

三年三組　CAT II

「結局、君は工学部に進むんだね。」
「ああ、一番俺の趣味に合っているからな。」
「まあ在学中はそれでいいけど。卒業したら大企業に就職…か。」
「俺だってお金は欲しいからね。」
「政府をも動かそうっていう大企業の一歯車になるってとこか。け

どね、出世しなきゃあ大した金は入りっこない。反政府主義の君がそんな大企業の中でうまくやっていけるとは思えないがね。」
「たしかにそうだ。今、俺が嫌っている腐敗した政府を支えているのがその大企業なんだからな。でも俺はうまくやっていくさ。表面上だけは、今の時代に流されてるようによそおうよ。」
「金銭欲のために、そこまで自分を殺せるとは大した奴だな。きみは。」
「しょせん人間なんて欲とエゴのかたまりさ、それをいかに正当化するかだ。俺はそれがへたなだけさ。」
「ま、それもそうだね。いや、絶対にそうだよね。」
「お前もそう考えてくれるとはホッとしたよ。ところでお前はどうするんだ。」
「理学部に進むよ。」
「就職は。」
「しないよ。大学に残って研究を続けるさ。」
「教授にでもなるつもりか。」
「金が欲しくなったらわからないね。でも今はそのつもりはない。だいたい、教育なんて無責任なこと、僕にはできないね。」
「その教育を受けてきた人間がよく言うよ。」
「それもそうだけどね。学歴社会における教育はそれはそれなりに意味がある。戦争中の教育も当時としてはそれなりの意味があったはずだ。でもね、教育というものを巨視的に見るときに、僕は信じられなくなるんだ。その時代時代によって大きくゆれ動いているからね。昨日まで竹やりの持ち方を教えて人間が、今日からは平和主義の思想を教えなきゃあならない。言いかえれば教育に絶対はないってとこかな。とにかく、僕には責任をもってやれないことは事実だね。」
「なーるほど。お前の言いたいことはわかったよ。けれどそれはあくまでも理想論なんじゃないかな。時代の流れなんて、そんなに簡単に予想できるもんじゃないさ。」
「人間理想をもてなくなったらおしまいさ。理想があるからそれだけ現実が正しく把握できるんだよ。君だって理想があるから現在の政治に対して不審をいだくんだろう。」
「まあ、そうかな。」
「理想と現実は背中合わせなんだよ。ただ、君はその表側がよく見えて、僕は裏側がよく見えているだけさ。」
「さすがに考えが論理的だな。俺にはできないことだ。ところで、理学部で何の研究をするつもりなんだ。」
「原子かな。特に原子核から中性子っていったところかな。」
「俺の作ったコンピューターとお前の研究した原子が結びついて、この平和主義の国を最強の軍事国にすることがないことを祈ってるよ。」
「平和利用が最高さ。」

島下由香

久方ぶりの修羅場。見上げれば月。
ああ、快。感。
——スクールL　一言通信

河野綾子

—集会室に入ると、そこはスプリングだった—
—座談会

中村和代

早弁につぐ早弁で苦労しました。
12時40分には恐怖の校内放送が。
—しいはく

白井幸子

〝もういやや—〟って思ったことが
幾度々。解放感にひたりきってます。
—あなたの恋愛論

From The Editors

尾崎博子

何の因果か、スプリングも二年目。
でも作るのって…。楽しくもありますが。——主張　このページ等

野崎恵美

No one can love you like I do.
昼休みが帰ってくる！
——いまみるゆめ・文芸

渡辺久絵

じいーっと見てれば何か出てくる。
23号はとびだすスプリングよぉ。
——いまみるゆめ・文芸

田中則子

ありがとうー協力してくれた人々に。
そして、今読んで下さったあなたに。
——自分をみつめて

編集顧問　森　一雄先生・岩井　晴彦先生

協　力　上田　達也・喜田貴美枝・内村はるみ
塩崎　陽三・南垣内祐子・漫　研

たくさんの応募ありがとうございました。
紙面の都合上応募作のすべてを掲載できなかったことをお詫びします。